

海螢

紫響



— . . . やっぱり居た。

俺は少し離れた所から今日も来てる君をそっと見つめる。

夜、この時間必ずこの海に来る彼女。

何だかいつも寂しげな表情の彼女が気になり俺から声を掛け、今では逢う度に話すようになった。

彼女の名前

仕事

好きな食べ物

恋人の存在

知りたい事や . . .

知りたくなかった事まで彼女と沢山話をするこの時間がそれでも1番の楽しみだった。

『蛍（ホタル）！やほっ！』

「あ！ハル。やほッ」

とニコッと笑って手を上げる。

俺は蛍の横に腰を下ろして彼女の方を向く。

気のせいかな？

・・・何だか彼女の表情が少し暗く見える。

『何かあった？』

「ん～・・・。」

俺の問いかけに更に悲しそうな表情をして彼女は俯く。

『何だよ、どうした？何かあったのか？？』

彼女が心配で捲し立てるように質問攻撃状態の俺。

そんな俺の質問に彼女は

「ここに来るのは今日は最後なんだ・・・。」

と、静かに小さく答えた。

え・・・と。

何て言った・・・？

思わず自分の耳を疑う。

『えっと、良く聞こえなかった！ごめん、もう1回言って？』

はは！と笑いながら彼女に頼む。

でも何度聞いても彼女からの言葉は

「もう、ここには来られなくなるんだ・・・」

と変わらなかった。

『え？何で？』

と聞かずに居られない。

どっか引っ越す・・・とか？

「うん・・・けっ・・・こんがね・・・」

あ～・・・なるほどね。

今のは皮肉にも一字一句聞き逃さず耳に入ってきたよ。

“結婚が決まったの”

って。

ここはおめでとうって言うのが筋なのだろうけど。

でも、ヘタレな俺は

『そっか。』

が精一杯。

てか、むしろ今おめでとうなんて絶対言えない！

逆に

『ホントに幸せなの？幸せになんの？』

なんてバカな事を口走ってしまう始末！！

クソ馬鹿野郎だ。俺は。

すると今まで以上に辛そうな、悲しそうな表情に変わり

「……………いじわる」

と言って彼女は俯いた。

思わず

『ごめん……』

謝る俺。

でも……祝福出来ないよ……。

それ以降彼女は俯いたまま喋らなかった。

俺も何だか何を喋っていいのかすら分からずただ黙って波の音を聞いていた。

「私ね……………」

『ん？』

暫くすると、蛍が沈黙を破り話かけてきた。

「ホントは・・・彼とこのまま結婚すべきかどうか分からないんだ・・・。」

と苦笑いしながら彼女は言った。

・・・だったら。

『だったら結婚止めちゃえばいいじゃん』

そうだよ。

分からないような結婚なんて止めてしまえ！

てか、止めてください！！

「そうだよね」

ニコッと笑って俺に言うから、思わず

『え?!じゃあ結婚止めるの?!』

って聞いてしまったけど、答えはNOだった。

何でも。
両家の盛り上がり方が半端じゃないらしく、
彼女自身も彼氏の事が別に嫌いになったとかそういうのではないらしい。

じゃあ・・・何が不満なんだ？

と逆に聞きたい。

彼氏の事も嫌いじゃないって俺にとっては1番どうでもいい情報もゲット出来て少々俺が不満。

『じゃあ、問題ないんじゃない？』

自然と口調も投げやりになる。

だって・・・好きな女が結婚するって言いつつ、男が好きだって言う。

俺はそれを聞く。

投げやりにもなるっしょ！！！！

だって人間だもの。

「・・・ハルが。」

？

俺？

キョトン顔の俺の顔を真っ直ぐ見る。

彼女は何か意を決したように、両膝の上に寄せられた左右の手をグッと結び

「ハルに逢えなくなるのが凄く辛くて寂しい！！」

はっきりそう言った。

・・・は？！

それって。

それって。

それってつまりどゆ事？！

俺、今完全頭パニック状態。

『ちょ、ちょっと待って！』

それって・・・どういう意味？』

って当然本人に確認するも、当の本人も

「うん・・・私にも良く分からない・・・でも逢えないのは辛い。」

だそうだ。

でも1つだけ今の時点で分かる事は

俺は、俺に逢えなくなるのが辛いと言ってくれる君は

それでも結婚してしまう人。

だという事だ。

『俺の事好きって事？』

「一分からない。」

でもハルと出逢って何か私おかしくて・・・。
だから今日お別れするのも凄く辛くてそれで『何だよ・・・。』

何かイライラしてきた。

『さっきから勝手な事ばかり言ってんじゃねーよ！何だかんだ言ったって結婚するんだろ
うがよ。』

俺は結婚する彼女に完全嫉妬心MAXで怒鳴ってしまった。

怒鳴った後心と我に返り、目の前で“ごめんなさい”と謝る君を見て自己嫌悪。

嫉妬と八つ当たりで最悪だわ俺。

『ごめん。』

彼女に謝ると、彼女は俯いてた顔を上げてこう言ったんだ。

「毎日ここに来るとハルが居るって思ってた！
最初は海が目的だったけど、途中からハルに逢うのが目的になってて・・・。

ハルと逢ってる時間が1番楽しくて！

でも・・・
結婚はもう話が知らない間に全て決まってる私にはどうしようもなくて！

彼の事も嫌いじゃなくて！

だからっ—————。」

『・・・ズルイよ。』

俺は彼女を自分の腕の中に抱き寄せた。

『ズルイよ。それ今言うの。』

「・・・ごめん。」

そう言って俺の腕の中で小刻みに震える彼女をギュツと力を入れて抱き締める。

このまま連れて逃げてやろうか・・・。

彼女を抱き締めてるとそんな気にさせるけど

でも、それは君は望まない事だって俺はちゃんと分かってる。

だから・・・今だけ。

今日だけ。

俺だけを見て・・・。

俺は彼女の顎をクイツと上げ、彼女の唇と自分の唇を重ねようと顔を近付ける。

拒否られるのも覚悟の上だ。

彼女の可愛い瞳を見つめながら顔をどんどん近付けていくと、最初は少し戸惑いを見せたが少ししてそっと目を閉じた。

そんな彼女に俺はそっと優しく口づけをした。

『蛍・・・俺の事忘れないで』

「私の事も忘れないで！」

俺達は月灯りが照らす中、
何度も何度も
まるで唇に自分達の事を記憶させるかのように熱く口づけを交わす。

そんな俺達を優しく見守るかのように

目の前の壮大な海が

波の音と共に

静かに蒼白く海蛍が輝き

月の灯りと共に

幻想的な風景を作り出していた。

「蛍、じゃあ今日来たら頼むわっ！」

『うん、でもなるべく早めに帰ってね？』

「ラジャ！」

と手を振り雅人（マサト）は買い出しに出掛けた。

ハルと最後逢ってから丁度2年の月日が流れ、私はそのまま結婚。

ハルとはあれっきり逢ってない。

当然連絡先も交換していない。

でも、ハルと約束した

「俺を忘れないで」

の言葉通り

私はハルを1日も忘れた事はない。

今日は雅人の弟が挨拶を兼ねて泊まりに来るらしく
朝から掃除に買い出しとバタついた1日となりそうだった。

雅人の弟は結婚式の時海外に行ってたらしくまだ1度も顔を合した事がなかった。

雅人曰くどうやら性格も顔も全く似てないらしい。

雅人はどちらかと言えば真面目人間だからなあ・・・。

めっちゃチャラ男とか？！

めっちゃオタクとか？！

どちらにしろちょっと楽しみ。

さて！掃除しよっ！！

雅人が買い出し行ってる間に掃除を済まそうと急いで掃除を始めた

——ふう……。
疲れた。。。。。

兄弟の嫁がズボラだと思われたくない一心で普段やらない所まで掃除をしたせいかめっちゃ疲れた！！！！

お陰で部屋は綺麗になったけど。

さて。

掃除も終わった事だし片付けて少し休憩しよっ！

私はエスプレッソマシンの電源を入れ掃除機やモップを定位置に片付けた。

と、その時玄関のチャイムが鳴った。

雅人かな？

そう思いながら玄関まで駆けて行き、勢い良くドアを開けながら

『お帰りなさい！！』

と言った先に居たのは

ハ・・・・・・・・ル・・・？

『——・・え？』

「こんにちわ！」

と笑顔で私に挨拶する男性は、紛れもなく

ハルだ！！！！

『え・・どう・・して・・？』

突然のハルの出現に戸惑う私に

「初めまして！お義姉さん」

と、ニカッと笑う。

え・・

初め・・・まし・・て？

・・・私の事忘れちゃったの？

だって目の前の男性はハルだもん！

ハルの声や顔を私が間違えるワケがない！！

『ハルだよね？！あの海のハルだよね？！！私だよ！蛍！』

お願い！思い出して！！

と詰め寄る私を冷たく見下し

「どこかでお逢いしましたけ？」

遥人だからハルって呼ばれてるけどお・俺、お義姉さん知らないッスよ？」

と言った。

『え・・・？』

「それとも」

そう言いながらニヤッと口角を上げ

「そうやって誘惑する気？」

と言いながら私の顎をクイツと人差し指で持ち上げた。

『ッ！！！！！！』

私は彼の手を払い除け一歩後ろへ下がり

『最っっ低』

そう言った私に

「どうでもいいけどさっさと部屋ん中入れてくんね？」

気が利かねえな。兄貴の嫁さん」

と冷たく言い放った。

何・・・コイツ！！

てか

ホントに忘れちゃったんだね・・・。

私の事。

「あれ？ 遥人！？」

と、その時階段下から両手に荷物抱えて雅人が買い物から戻って来た。

雅人は彼を見て足早に階段を駆け上がって

「早かったんだなっ！！！」

と肩を抱き嬉しそうに笑う。

彼も嬉しそうに笑った。

けど・・・。

私は全く笑えなかった。

ハルが雅人の弟だと言う事もだし

私の事を忘れてしまってる事も重なり
笑える心境ではなかった。

「まあ上がれよ！！」

と雅人は彼の背中を押しながら部屋の中へ案内した。

「あ、蛍！これ買って来たよ！」

上機嫌で買い物袋渡す雅人に

『あ、ありがとう・・・』

と少し戸惑いながら返事をする私。

「ん？どうかした？」

と私の目線に屈み、“熱かな？”なんて言いながら額に手を当ててくれた。

のに

向こうから彼・・・ハルの視線に気づき雅人の手を振り払ってしまった。

「蛍・・・？」

雅人はビックリした顔で私を見ていた。

あ・・・！

『ご、ごめん！額汗だから汚いと思って！ははは・・・』

「いや、大丈夫ならいいんだ！」

とニッコリ笑って雅人は私の頭に優しくポンッと手を乗せて言った。

『・・・ごめん』

何やってんだろ・・・私。

「あのさあ〜」

部屋の奥からハルがこっちを向いて呼びかける。

「どーでもいいけど、コーヒー溢れてっけど？」

『あっっ！！！！』

思い出した！！

ハルが来る直前に電源オンしたままだった！！！！

普通のコーヒーだと勝手に抽出されるけど
エスプレッソ側は手動で止めないと出続ける不便なヤツを使用した。

エスプレッソが出るまで時間もかかるからとオンしておいた事をすっかり忘れてた。

私は急いで雑巾を取ってびちゃびちゃになってる所を拭こうとしたその時

「あ！待てっ・・・」

とハルが止めるも遅く

『あっ・・・っ！！！！』

私が丁度拭き始めた場所は抽出されたばかりの温度が高い所だった。

色々テンパリ状態の私は気付くワケなく、まんまと軽く火傷。

するとハルが火傷した側の腕を引っ張り

「なにやってんだよ！！」

と怒りながら流水で冷やす。

私は思わず近付いたハルの横顔にドキッとしつつ

『ごめん。・・・なさい』

と謝る。

そんな私にハルが小さく昔のような優しい声で言った。

「バカだな」

え！？

その声にパッとハルの方を見るも、ハルはサッと私の傍を離れ

「兄貴！」

と雅人の傍に移動していた。

「蛍っ、大丈夫か?!」

雅人が心配顔で傍に来て火傷した手を取り

「真っ赤だなあ・・・薬塗って冷やしながらゆっくりしてろな？」

そう言って優しく笑った。

『でも・・・』

「いいから！後は俺と遥人でやるから！」

「えー！俺客なのにい?!」

「うるせっ！早く手伝え！」

雅人に言われ渋々雅人の傍に行くハルに

『ごめんなさい。ありがとう』

ペコッと頭を下げた私にハルは

「・・・だっせー女」

と耳元で冷たく囁き雅人の横に行った。

ダサいって・・・。

さっきは優しくかったのに。

あ～・・・ダメだ。

我慢限界。

そう思った瞬間、ハルと雅人を見てる視界が歪む。

私は溢れてくる涙をぐっと我慢し、必死に平常心を演じながら

『雅人！ちょっと横になってるから』

と伝えた。

「大丈夫か??」

と心配して私を見る雅人と、無表情のハル。

今すぐこの場から居なくなりたかった私は“大丈夫”とだけ言って寝室に向かった。

寢室へ入りベッドに横に横になる。

さっきまで必死で我慢してた涙がダムが決壊したかのようにとめどなく流れる。

私はずっと逢いたくても逢えなかったハル

毎日毎日あの最後の夜を思い出して

ハルを忘れられなくて・・・。

やっと・・・やっと再会出来たハルは

雅人の・・・旦那の弟。

私の事も忘れてて・・・。

《初めまして》

《どっかで逢ったけ?》

の彼の言葉が頭の中ぐるぐる駆け巡る。

ハル・・・

本当に忘れちゃったの・・・？

私はハルの記憶の中に居ないの？

《ダサイ女》

さっきのハルの言葉が今更ながら胸に突き刺さる。

もう・・・私も忘れなきゃ・・・

あの夜の事は全て忘れる。

ハルとの思い出を全て忘れる。

と決意した私はそのままベッドの上で小さく小さく丸まり

泣き疲れてそのまま眠った。

「おい、ハル！携帯鳴ってるぜ？」

言いながら携帯を俺の方に投げるポーズするタカシ。

俺は構えて無事我が携帯をキャッチした。

『サンキュー！』

と、たかしに言いながら携帯を見ると新着メール1件の文字。

俺はメールを開くと兄貴からだった。

【無事挙式終わったぞー！！】

と共に画像が1枚添付されていた。

どうせタキシード姿なんだろうけど、まごにも衣装状態かぁ？！

とか思いつつニタニタ笑いながら画像を開いた俺は真顔で画面に食いついた。

え・・・これって・・・

蟬 . . . ?

画面の中の画像は兄貴とその横で嬉しそうに微笑む女性

紛れもなく蛍だった。

え

どういう事?!
何で兄貴と蛍が・・・。

俺は1年前の記憶を一生懸命蘇らす。

蛍の彼氏の特徴

蛍の彼氏の名前

兄貴だと裏付ける情報が何かなかったか必死に思い出す。

が

ハナから男の話に興味なかった俺は記憶にあるワケがなく

当然裏付ける情報なんて何1つナイ。

もう1度携帯画面に映し出される画像をじっくり見る。

あ————・・・

確定。

思わず苦笑してしまう。

だって画像の端に

【Happy Wedding

MASATO&HOTARU】

の文字がデコられてたから。

俺はあれから・・・あの最後の海から半年毎日1人海に行った。

「もう来れない」

そう言った彼女が

もしかしたら・・・！

もしかしたら今日ここに・・・！

と思ったら向わずには居られなかったんだ。

ま・・・世の中そんな甘くなく。

半年待ち続けたけど彼女は言葉通り現れる事はなかった。

それでも逢いたくて、逢いたくて・・・。

すれ違う女性で彼女に似てる人が居たら思わず振り向いたり、後ろから声を掛けたり。

とにかく彼女を忘れる事なんて1日もなかった。

忘れようとしなかった。

彼女との約束もそうだけど、俺自身絶対忘れなくなかったんだ。

そんな彼女が1年越しで間接的にだけど俺の前に現れた。

兄貴の嫁として。

これは・・・夢なのかもしれない！

なんて現実逃避に走る。

思いっきり自分で頬を引っぱたくが虚しくただジンジンと痛みが走るだけ。

まあ当然なんだけど。

俺は再確認のため、もう1度携帯を取り兄貴と蛭・・・と思われる人の画像をしっかりと見る。

結論

何度見ても兄貴と蛭の事実は変わらず。

俺は再度、兄貴の嫁は蛭だと言う事を無駄に確認しただけだった。

『はははは・・・。』

思わず笑いが出る。

てか、笑うしかねーし。

惚れた女が義姉って・・・ドラマか？！

昼ドラの世界じゃねーか！！

ああ～・・・きついわ。マジで。

一筋の涙が頬を伝う。

何で兄貴なんだ・・・っ。

俺はその場に崩れ落ち蛍の映る携帯を握り締め気が済むまで泣いた。

神様・・

この試練俺に乗り越えられますか？

俺には乗り越える自信がありません・・・。

1年間だった海外任期を上には掛け合い2年に引き伸ばして貰った。

本当はこのまま一生コッチでも良かったんだけど・・・。

彼女と兄貴が生活する国以外ならどこでもいいから行きたかった。

あの画像添付以来

俺はがむしゃらに働いた。

全てを忘れるために。

蛍への想いを断ち切るために、とにかく働いて忘れようとした。

このままココに居て何も考えず働いてれば自然と忘れさせてくれる。

蛍の事なんて簡単に忘れる。

なんて思ってた矢先・・・。

日本に帰国要請が。

俺は何度も上にこのままココに居させてくれと頼んだが答えはノー。

俺は渋々日本に帰国する事になったんだが・・・。

実家へ帰るつもりがさらさらなかった俺は会社近くのビジネスホテルへ滞在期間分予約を入れてた。

親にも一旦帰国するけど実家へは寄らないと伝えていた。

戻った間に兄貴と蛭の2ショット拝見とか冗談じゃない！

と思っていたのに。

と思って色々手配して後は帰国するだけだったのにつっ！！！！

兄貴が全てキャンセルして回った。

流れはこうだ。

俺の一時帰国をオカンが兄貴に話す。

俺の泊まろうとしたビジネスホテルがどうやら兄貴の新居と近かったらしい。

兄貴の独断でキャンセルする。

俺、滞在期間中兄貴んち。

てか

無理っ！！

ムリ！ムリ！ムリ！ムリ！ムリ！

ぜったい無理っ！！！！！！

俺は兄貴に絶対に嫌だと何度も伝えて、何度も他で泊まると伝えるも完全拒否。

「なんだ？お前、俺んちに泊まれない何か理由があるワケ？」

なんて聞かれる始末。

そんなん聞かれたら

『はっ？あるわけねーしっ！んな理由あるワケねーし！』

って言うしかねーじゃん。

まさか、あんたの嫁さんに惚れてました！なんて言えねえっつの！

「じゃあ、決まりなっ！」

って言うよね～。

俺でも言うよね～。

強引だよね～！！！！

こうして俺に何の決定権も与えられないまま全て決められ俺は兄貴の家に寝泊まりする事に。

あ——っ!!!もうっ!!!

俺はベッドに身を投げる。

何で上手くいかないんだっ!

クソっ!!

せっかくこの1年頑張っって忘れようと努力してきたのに

何でこのタイミングなんだよっ!

俺は俯せになってベッドマットに何度も何度も拳を振りかざす。

はあ・・・俺、どうすればいいんだ。

———そうか。

困り果ててる俺に閃きの神様が舞い降りた瞬間。

全くの他人で居ればいいんだ。

彼女の事を何1つ知らない全くの他人。

そうすれば何も動じる事はない。

そもそも俺と彼女の間には何もないし

てか、そもそもただの他人だし。
それに・・・

それに俺は彼女の事を忘れたんだから。

だから俺は彼女の他人以下の存在なんだから。

だから何の問題もない。

大丈夫。

俺は上手くやれる！

大丈夫と何度も何度も念じ、俺は兄貴んちに行く日を迎えた。

“大丈夫”

この言葉を朝からずっと念じ、今兄貴の家の玄関前に立つ。

どうか兄貴が出ますように・・・！

そう願いながら少し震えつつインターホンを押す。

「はあ～い！」

と中から聞こえて来た声は、2年ぶりに聞く蛍の声だった。

少し甲高く、可愛らしく女性らしい心地良い蛍の声は2年経っても健在で

何とも言えない気持ちが一気に俺に押し寄せてくる。

その感情に負けそうになり俺は来た道を引き返そうとした瞬間

目の前のドアが開き、中から出てきたのは

俺が昔1番逢いたくて、今1番逢いたくなかった人

蛍

だった。

玄関前に立つ俺を真っ直ぐ見て目を見開く彼女。

無理もねえわな・・・。

彼女の視線に堪らなくなり事前に練習してた第一声を彼女に投げかける。

『初めまして！！』

って。

なのに君は俺の気持ちになんて全く気付くわけもなく俺の名前を何度も何度も呼ぶ。

「ハル」

「ハル」

って・・・。

俺はこんな形で君に名前なんて呼んで欲しくなんかないのに・・・っ！

苛立った俺は君に最低な形で最低な言葉をぶつける。

君は俺に向かって

「最低」

と一言言ったけど、それでも構わない。

君が俺の名前を呼ばなくなるなら最低でも何でも今は良かった。

義姉の君からハルと呼ばれたくなかったんだ・・・。

お互い黙って俯いたその時、丁度兄貴が帰って来た。

俺達の気まずい空気なんて気付く事なくご喜樂に帰って来て玄関先で彼女と何やらイチャイチャ
。

俺、何やらイライラ。

彼女も嬉しそうに兄貴に微笑みイチャイチャ。

俺、更にイライラ。

俺の前でイチャついてんじゃねーよっ！！！！

200%の嫉妬心丸出しで2人の仲を裂くようにコーヒーが溢れてる事を冷めた声で伝える。

案の定彼女がすぐ処理に来た。

が、即火傷。

熱がる彼女を見た瞬間、思わず体が勝手に動く。

彼女の腕を取り流水で少しの間冷やして火傷の様子を見る。

小声で“痛い” “痛い”と呟く君。

相変わらずドン臭いところは変わらないんだな……。

なんて思わず昔を懐かしんでしまった時に俺は気付いた。

君が凄く間近で俺の顔を上目使いで見てた事を……。

思わずドキッとして俺は彼女からすぐさま離れ兄貴の居る部屋に移動した。

何でだよ……。

何なんだよ……。

俺にあんな顔向けんじゃねーよ……。

俺は色んなイライラと、色んな感情が合わさって

嫉妬心100%
八つ当たり100%

の感情で彼女を再度傷付けた。

その後彼女は部屋から出てくる事はなかった。

彼女は寢室へ籠ったつきり部屋から出て来なかった。

絶対俺のせいだ。

やっぱり俺……………。

俺はここに居るべきじゃない。

そう思いキッチンに居る兄貴に話掛ける。

『兄貴、俺やっぱり「遥人！俺調味料切れてたからちょっと買い出し行ってくるわ！」

兄貴はそう言ってさっさと財布片手に出て行こうとした俺より先に出て行った。

俺が出て行きたかったしっっ！！！！

俺はポツンと広いリビングに残された。

落ち着かない度ハンパないっすけど？！

周り見渡せば兄貴と蛍の2ショット写真盛り沢山。

こっそり1枚兄貴の所切り取って俺に変えても分かんねーんじゃね？

なんてイタズラ心も今の状況はただ虚しいだけに過ぎない。

はあ……………。

全くもって居心地悪い。

溜息と同時に床に寝転がると彼女が居る寢室のドアが目に入った。

そういえば・・・火傷どうなったんだろ？

俺が何も心配しなく^{って。}てもいいか。

いや……でも……。

俺は救急箱を探しその中から火傷の軟膏を取り出し彼女の居る寢室をノックした。

義弟が心配して・・・ってのだったら違和感ないだろうなんて思った故の行動だった。

・・・あれ？

もう1度ノックをする。

が、全く中から音がしない。

『失礼しま・・・』

そお〜っとドアを開けて中を伺うとベッドの上で小さい彼女が更に小さくなって横になっていた。

眠ってるのか??

俺はそっと彼女に近付く。

彼女の顔を静かに覗き込むと、彼女は泣いたのか

涙の跡を残したまま眠ってた。
この涙はきっと俺のせいだ。

俺が酷い事ばっか言ったから。

俺は蛍の顔に触れ、そっと涙の玉を拭う。

頬にかかる前髪もそっとかき上げ髪の毛で隠れてた彼女の顔をじっと眺める。

2年前と全く変わらず綺麗な横顔の君。

一生懸命君を忘れようと必死に頑張ったこの1年。

本当に必死に必死に頑張ったよ俺。

絶対君に逢っても大丈夫だと思ったのに

結局全然ダメで

俺は君を無駄に傷付け泣かせてしまった。

でも…………。

俺、君の泣き顔見て1つ分かったんだ。

君への気持ちもあの海の事も

全部忘れるなんて俺には出来ないって事。

俺には君を忘れるなんて最初から無理だったんだ……。

なのに君を泣かせて……

俺はもう1度君の涙を優しくそっと拭う。

ごめん。泣かせて。

ごめん。辛い思いさせて。

ごめん。

……俺が義弟で。

俺は君に約束する。

君を俺の事で泣かせないようにするという事を。

俺は君への想いを絶対忘れない。

だけど君は俺を忘れてくれ。

君が2度と俺の事で辛く、泣かなくて済むようにするにはただ1つ。

俺の事を嫌いになればいい。

俺をとことん嫌いになればいい。

そうすれば俺の事で泣かなくて済む。
俺は君がこの先俺の事で泣かなくて済むように

君に嫌われる。

君がこの先俺の事で辛くならないように

俺は大好きな君に嫌われる。

今でも

結局忘れられなかった君を守り続けるために

君に嫌われる。

君をこの先ずっと想い続けるために

俺は君から嫌われる。

俺はもうこの先

絶対的に触れる事もないだろう

涙で濡れた頬に

彼女が起きてしまわないよう

優しく静かに

キスを落として

そっと部屋を後にした。

うわぁ・・・やっちゃった。

ガッツリ寝てしまった・・・。

目が覚めてビックリ。
だって部屋の中真っ暗だし、時計見たら22時だし。

どんだけ寝てんだ！って思わず自分にツッコミ。

でも・・・起きたけど

起きたけど何か部屋から出にくいなあ・・・。

だってハルが居るから。
ハルの存在を思い出し一気に気が重くなる。

このまま、また寝てやろうか・・・。

って流石に全く眠くないし。

どうしよう・・・。

というか、この家は私の家なんだし？！

私が居づらくなるのはオカシイわけだし？！！

そうよ。

堂々と出て行けばいいのよ！

と言い聞かす事30分。

よよよよ良しっ!!!

堂々この部屋から出てやるっ!!!

潔い思考と最大級のへっぴり腰でベッドから立ち上がろうとした。

その時ようやく私に掛けられてたタオルケットの存在に気付いた。

あれ?
私が掛けたんだっけ??

寝る時の記憶を思い出す。

でも記憶が蘇るのはそれより前のハルの言動で私は頭を振って頭から消す。

同時にさっきまでの強気な思考も多少の弱気レベルまで一気に下がりつつある。

いかん!! いかん!! いかんっ!!
弱気になったらダメっ!
この部屋から一生出れなくなっちゃうよ!!

と人生レベルメーターで頑張って強気まで戻し立ち上がった。

が。

所詮、ヘタレ根性。

かなりそおーっとドアを開けてリビングの様子を伺う。

THE 空気を見て出て行く作戦！

静かあかにドアを開け雅人の姿を捉えた。

「あ！蛍！」

雅人も私の姿を捉えてましたとさ。

そりゃそうだよな。
開ける時ギィギィ音立てれば気付くよね。

ミッション
完全失敗に終わる。

「大丈夫かぁ??」

雅人は私の前まで来て顔を覗き込む。

『あ、うん。ごめんね?』

「何言ってるんだよ。お腹空いてない?」

あ・・・そう言えば。

「そこ座ってて。温めるから」

雅人は私の表情で何やら読み取ったらしく優しく笑ってキッチンへ行く。

そして私はハルと2人きり。

気まず過ぎるっ!!

『あ、雅人! 私がするから!!』

とこの場から逃げ出すように雅人の方へ行こうとしたけど

「いいから!」

一言でストップかけられ結局2人。

うう・・・。

私は出来るだけハルから離れて座ろうとハルと対角の位置に腰を降ろした。

当然ながら私の方を見向きもしない。

尚更私とハルの空間には気まずい空間が漂う。

そんなこたお構いなしに鼻歌まじりにレミオロメン歌う雅人。

あ〜。

雅人が今世界中で1番羨ましいよ・・・。

「“義姉さん” もういいの？」

気まずさの中ハルがぶっきらぼうに火傷した右手に視線をやりながら聞いてきた。

“義姉さん”

ああ・・・今心臓強打。

めっちゃ痛い。

『うん・・・』

「にしてもさあ、火傷するわ爆睡して飯作んねえわ、兄貴も大変だな?!」

途中私の方をチラッと見て鼻で笑いながら雅人に話かける。

「遥人！何言ってるんだよ。俺が休んでろって言ったんだから。」

“なっ！”と言って私に微笑む雅人。

『ご・・・ごめんなさい』

「何で蛍が謝ってるんだよ。蛍は悪くないだろ。さっ、食べな？」

笑顔で料理を運んで来た先に見えるハルの冷たい眼。

・・・そんな眼で見ないで・・・。

以前の優しい眼差しの面影なんてそこには微塵の欠片もなく。

ただただ冷たい眼
ただただ冷たい言葉

それだけをぶつけるハル。

「どうだ?! 旨い?」

『う、うん。』

雅人が料理の味を聞いてくるけど、正直味なんてさっぱり分からなかった。

「あ、そだ。」

『な、何？』

「遥人暫くウチに泊まるから！」

『・・・』

えっと。
すんません。

今・・・なんと？

『え、えっ・・・と。ごめん良く聞こえなかった』

「ん？あ～！だから、遥人暫くここに居るから！」

私にそう告げ、すこぶる笑顔の雅人はハルとハイタッチ。

私はパニックでクルクル状態。
『えっ！ちょ・・・どういう事?!』

「遥人がこっちにいる間ウチに泊まる。って、さっきから言ってるまんまだけど。」

『な、何で・・・』

「うん。俺が決めたよ」

ってニカッと笑うな！馬鹿雅人！！

「というわけだから、よろしく。義姉さん」

雅人に完全乗っかり気分のハルもニカッと笑う。

・ ・ 笑うな兄弟！

『あの ・ ・ き期間は？』

「一ヶ月！」

1ヶ月。
30日
720分

悪夢だ ・ ・ っ！！！！

『だだだだだって！！雅人仕事で遅かったりするじゃんっ！』

余りのテンパりで吃りまくりの私。

吃ってもハモっても何とか阻止したいっ！

「だからだよ。」

へ？

「蛭も寂しいだろうし、遥人が居たほうが防犯にもなるし一石二鳥！」

得意げにVサインされても・・・。

防犯になっても私の心を荒す主犯格だよ・・・ハルは。

「まっ！という事だから！じゃっ、風呂行ってこよっと！」

『えっ？！ちょっと！まさ・・・』

あああああ。

阻止完全失敗。

雅人の発言で賑やかだったリビングも雅人の入浴によって再び静寂さを取り戻し

私とハルはまた同じ空間に。

どうしよう・・・。

再び気まずい・・・。

てか明日から気まずい時間が増えるって事？！

地獄だ。
地獄以外の何物でもない。

ただでさえ初日からこんななのに・・・。

私・・・大丈夫かな。

あ・ ・ ・そだ。

ハルの寝る部屋・ ・ ・。

『ハル！ ・ ・ あ。

はる ・ ・ ・ と君』

「う〜ん？」

TVを観て笑ってたハルは私の呼び掛けに振り向き私を見た。

その表情はさっきまでTV観て笑ってたのとは真逆で冷たい。

「何？」

『あ、あの暫く使う部屋を・ ・ ・』

「あ〜。ありがとう。義姉さん。」

ハルは荷物を持って立ち上がった。

「あ、そだ。」

くるりと私の方に振り返る。

「“ハル” て呼ばないでくんない？初対面で馴れ馴れしい。」

そう言って荷物抱え、暫く使う部屋に入ってパタンとドアを締めた。

「ッ……………」

“ハル” と呼べと言ったハルから

“ハル” と呼ぶなと言うハル。

もう私はハルと呼ぶ事さえも許されないんだね・・・。

ハルの冷ややかな視線を思い出す。

大好きだったハルの声。

ハルの優しい眼差し。

今は全て真逆。

あんなに大好きだったのに

今の私には怖すぎる・・・。

もう私には向けられないんだね・・・。

私はハルが居る部屋を見つめながら
また溢れる涙をグッと堪える。

なんでこんな出逢い・・・

なんで今・・・

なんで

私は義姉なんだろう・・・。

神様

神様は乗越えれる試練しか与えないと言うけれど・・・

私は乗越えられるのでしょうか・・・。

——ああ・・・。

外はまるで私の心を表すかのように雨だな。

なんて朝から詩人的思考しながら軽く現実逃避。

したいのに。

「蛍、おはよう」

なんて横から雅人に笑顔で現実に引き戻され逃避失敗。

『おはよう』

眠そうに目を擦る雅人に挨拶を返す。

私は全くあれから寝れず結局徹夜。

と言っても仮眠したせい&ハルの件で眠たくなかったのもあるけど・・・。

ああ、気が重い・・・。

朝から憂鬱感MAX状態でリビングへ行こうと立ち上がった時、ふと疑問が残る。

それは

普段寝る時から朝食食べて着替えるまでノーブラだけど今はハルが居る。

ブラすべき？

当然ながらノーメイクだけど・・・

メイクすべき？！

どっち???!!!

少しの間真面目にどうするか考えたけど・・・

うん。

ノーメイクは、仕方ないとしてブラはしておこう。

そうしよう。

ってか毎朝こんな心配もしなきゃならないのかよ・・・。

憂鬱度レベルアップ

私の精神面さらにダウン。

・・・ハルもう起きてるのかな。

朝一で逢いたくないな。

なんてどんより気分でブラを付け部屋を出ると
まだハルの姿はなくホッとする。

私は雅人がコーヒーを入れてくれてる横で朝食の仕度に取り掛かる。

「遥人起きて来ないな。」

『う、うん。疲れてんじゃない？』

「起こして来『いやいやいや！！』

まだ寝かせてあげたら？！』

わざわざ起こしに行こうと立ち上がる雅人を力づくで抑え付けまた座らせる。

いらん事せんでいいっ！！

雅人の行為を力いっぱい阻止する。

「そうかあ？」

『そそそだよ！はははは・・・』

よっしゃ！
今日は阻止成功っ！！

朝から冷たいハルは正直勘弁・・・。

だから阻止出来て良かったあ。

って思ったのに

「おう！遥人起きたか。」

.....。

起きてきたじゃないかっ！！

阻止に成功して結果失敗に終わるってやつ？！

昨日から何だか全て上手く行かない。

というかハルが現れてから全部上手く行かない。

はあ・・・。

私は溜息つきながら人数分のコーヒーを入れ朝食をテーブルに並べる。

朝は雅人のご飯党
私はパン党

だから2種類の朝食を準備するんだけど

またまた疑問が浮上

ハルはどっち党なんだろ・・・。

私はハルに直接聞くのは避けて雅人に聞いてみる。

『雅人、遥人君は朝どっちなのかなあ？』

「あ～・・・どっちかな？」

って言いながらトイレ行くなっ！！

行くなら聞いてから行けっ！！

どうしよう・・・。

私・・・が聞くの？

チラッとハルの方を見る。

床に座って眠そうな顔してテレビを見てるハル。

髪の毛は寝癖なのかパーマのせいなのかボサボサ。

切れ長でクリッとした綺麗な眼もほっそくて眼力0の力なき眼

何度も何度もアクビをしては涙を流すハル。

朝のハルってこんな感じなんだ・・・。

知らない一面が見れて今更ながら少し嬉しい自分が居て

だからこそ苦しくなる・・・。

朝食も聞かなきゃだけどハルの冷たい態度が怖くて苦しい・・・。

でも・・・。。。

『あ・・あのっ・・ハ・・遥人君っ・・・』

人生最大級のこれでもかっ！！ってくらい勇気を振り絞って、目は合わせないように下向いたままハルに声を掛けた。

今、ホント誰かに“良く出来ました”と凄く褒めて貰いたい気分！！

「・・・何？」

私の呼び掛けに少しの沈黙の末
ハルから返事。

『あ・あの朝ご飯、パンとご飯どっちがいい・・のかな・・』

「・・・どっちが美味しいの？」

え・・そう言われても。

『どっちもあんまり変わらない・・かな。好み。デス。』

「ふ～ん・・じゃあ一緒にいいよ。」

何が？！
誰と？！

『えっと・・一緒にって・・？』

「あんたと一緒にいいよ。」

『分かった。ありがとう。』

終始目は絶対ハルと合わせないようにして会話終了。

“遥人君”

と呼ぶ私に

“あんた”

と返すハル。

あんた・・・か。

朝一発目から何だか心が痛い。

「ご飯準備出来た？」

トイレから無駄に上機嫌で戻って来た雅人に何となくイラつく。

くそっ。
あのタイミングで行くなっつのだ！！

『出来てるしっ！』

不機嫌丸出しで答える私。

「え？あれ？何か機嫌悪い??」

と私の顔色伺う雅人。

そんな雅人を無視してさっさと座りパンを口に頬張る。

完全雅人に八つ当たり。

相談なく勝手に泊める事にした事にさえ腹が立ってくる。

でも、じゃあ相談されてたら・・・？

間違いなく快諾してたはず。
だって

義弟がハルなんて知らないんだから。

結局、結果は一緒だったのか・・・。

そう考えると溜息しか出て来ない。

そんな私と対照的に朝から上々な雅人は

「旨い！やっぱ蛍のご飯は最高っ！」

と朝だからさほど大した物は作ってないのに褒めまくる。

人間、褒められると嬉しいもので不機嫌が緩和。

「なっ？旨いだろ？遥人！」

なっ！？！？
そっちに振るの！？

絶対貶される・・・！
昨日散々貶されたし！

思わず怖くなってギョッと目を閉じる。

「・・・旨いよ」

——え？

「だろ？！蛍の料理は絶品なんだぜ！」

「うん。」

雅人はハルの返事に更に気分上々。

ハルは黙って食す。

私は・・・

貶されると思って覚悟してたのに真逆な言葉で一気に脱力感。

“旨い” と言ってくれた！

嬉しくて思わず顔がニヤけ顔。

同時にホッとしたせいか私の視界が涙で滲む。

私はそれを2人に悟られないように
黙々と目の前の朝食を食べ続けた。

雅人は朝食を食べ終わるとスーツに着替え出勤時間。

「じゃあ行ってくる！」

『あ、あの・・・今日は早い?!』

出来るだけハルと2人を避けたい私は早く帰ってとニュアンスアピール。

「また連絡するよ」

と軽く私の額にチュッとキスして笑顔で出勤した。

どうか私のニュアンスアピール伝わりますように!!

カー一杯願いを込めつつ後ろ振り返り1歩踏み出した瞬間何かにぶつかる。

なんだ???

見上げるとそこには私を見下ろすハルの顔が。

ひい!!

『ご、ご、ごめんなさいっ！！』

急いで離れようと後退する。

が。

『・・・え？』

腕をハルに引っ張られ私はハルの腕の中に居た。

当然私心臓ドキドキパニック状態。

なん・・・で？

慌てて離れようと力を入れると更に腕に力を入れ抱き締められる。

ハル・・・どうし・・・

！！！！

もしかして？

もしかして思い・・・出してくれた・・・とか？

そう思って少し嬉しくなる私に

「どう？」

『え？』

突如ハルの声に見上げるとニヤッと笑い私を見下ろすハルの顔が。

直後ハルは私の耳元で囁く。

ハルの言葉はさっきの私の淡い期待を打ち砕くには一番簡単な方法

「兄貴以外にも簡単に抱かれるのな。

どう？兄貴じゃない男に抱かれるの好きだろ？」

「！！！」

と酷い言葉を私に浴びせ
笑いながら出掛けて行った。

パタン！とドアの締まる音を背に聞く。

・・・バカだ。

一瞬でもドキっとした自分がバカだ。

抱き締められて期待した自分が大バカだ。

忘れろと決めたくせに・・・。

心が・・・痛い。

誰か

誰かお願いします。

私に彼を忘れる方法を教えてください・・・。

同じ空間に居る彼を忘れられる方法を誰か教えて・・・。

苦しいよ。

私は苦しさに負け、その場に泣き崩れた。

降り続ける雨のように
私の心にも止まない雨が降り注ぐ。

戻らない。戻れない

----- . . .

『え?! . . . うん . . . そっか。じゃあね。』

やっぱりか。
そんなことだろうと内心思ってたよ雅人君。

夕飯の買い物から帰宅した時雅人から連絡。

朝の私の“早く帰れアピール”も虚しく今日は仕事で遅くなるらしい。

いつもなら仕事だから頑張っ！とエールを送る私も
今日ばかりは随分感じ悪い対応だったと思う。

でも . . . ハルと2人は絶対嫌。

どうしよう。

. . . そうだ!

何時に帰宅するのかさっぱり分からないけど
夕飯だけ作って置いて家から離れる事に決め

善は急げとサクサク準備し

思い立って1時間後には料理も完成し出掛ける準備完了の私。

我ながらさすが！！

玄関付近で何か物音がする度に

“ハルが帰って来た?!”

とビクッとなってしまう。

完全ハル恐怖症。

料理にラップしてテーブルに並べ
“出掛けてきます”と書き置き。

ふと時計を見ると19時を回っていた。

ヤバ!!
早く出よう!!

私は財布と携帯だけ鞆に詰め急いで玄関に出て
目の前の階段を降りかけた時

下から階段を上ってくる音が。

まさか・・・。

普段当たらない勘もこんな時だけ嬉しくない程当たる物で。

足音の主は予想裏切らずハルだった。

瞬間、私の脳内に

「うわぁ・・・」「やだなぁ」「ゲッ！」

の最悪の時にしか出ない言葉が飛び交い、
思わず階段降りる足が止まる。

ハルも何を考えてるのか分からないけど階段を上がる足を止める。

私は少しでもこの場に居たくなく
駆け足でハルの横を無言で駆け下りようとした時

ガシッと腕を掴まれ駆け足強制停止。

「どこ行くの？」

『・・・ちょっと。』

「こんな時間に？兄貴は？」

・・・こんな時間にとって。

私だって好きで出掛けるわけじゃないし！
誰のせいだと！！

私はハルを睨み付け
腕を振り払い
急いで階段を駆け降りた

もう・・・。

痛いじゃん・・・。

ハルが掴んだ腕が熱く。

ジンジンと痛む。

あ

痛いのは腕より心か。

一々、ハルの言動に辛くなる自分にも腹が立つ。

いつまでもこんなじゃダメだ。

そんな事を思いながら私は目的の場所に着いた。

最近良く来る私のお気に入りの公園だ。

私はお気に入りの公園のお気に入りの場所に腰を下ろし空を見上げる。

朝あれだけ降ってた雨も昼過ぎには上がり、今目の前には綺麗な星空が広がる。



多少雲もあり満天とは言えないけど

星と雲と月灯り

それが合わさる部分の何とも言えない神秘さも好き。

私がこの場所を見つけたのは2年前。

ハルと最後の日から数日後

私はこの場所を見つけた。

大好きな海が見える場所じゃなく
星が綺麗に見える場所を探した。

その理由は

ハルが好きだと言ってた星が
綺麗に見える場所を探したかったから。

ハルが好きだと言ってた星を見て
ハルを近くに感じて居たかったから・・・。

ハルと同じ星空を1番綺麗に見てたかったから。

だからこの場所を探して以来2年

雅人が遅い時・居ない時・時間を見つけてはこの場所に来ていた。

ハルを感じ、ハルを充電するために。

でも・・・今は。

私はハルに掴まれた場所を摩る。

充電・・・じゃなく放電だな。

ハルを放電。

あああ・・・。

何でこんな事になっちゃったんだろ。

って。分かってる。

自分の選択が間違いだと言う事。
全て自分が巻いた種だと言う事。
全部全部分かってる。

2年前

ハルと別れた後モヤモヤしてた自分の気持ちに確信した。

ハルが好きなんだ。って。

でも・・・ハルへの気持ちより私の勇気が足りなかった。

結婚を辞めると親に切り出す勇気。
ここにきて雅人に別れを切り出す勇気。

それが私に足りなかった。

それでもハルが忘れられなくて。

勝手なんだ。私。
すっごく勝手。

だからってハルとどうなりたいか
雅人とどうしたいか
そんな所まで考えれなくて・・・。

でも今は雅人の弟として
私の義弟として目の前に現れた。

そして私の事なんて全く覚えてなくて
当然ハルの頭の中で私はただの

義姉

なワケで。

私もそうしなきゃ、そうじゃなきゃいけないのに。

頭ではちゃんと分かってるのに心がちゃんとして来てくれない。

・・・あの頃に戻りたいけど

戻っちゃダメなんだ。

もう戻る事すら出来ないんだね。

当たり前現実を当たり前思う辛さを感じながら買って来てたコーヒーを開ける。

・・・とその時。

「な～にして～んの？」

と突如背後から声を掛けられた。

私は声の主の方向に振り向くと、
全く知らない男性がニタついた顔で私を見下ろして居た。

何だコイツ。

キモい。

「ねえ、1人？俺も1人なんだ〜！」

無視してるのにお構いなしに相変わらずニタつきながら話掛けてくる。

もう・・・今アンタに構う程気持ちに余裕ないっつの！！

私は総シカトでその場の荷物を取り立ち去ろうとした。

が。

ガッシリ肩を掴んで来た。

『ちょっ・・・！！！！』

やだ！ホント何コイツ！

「だ〜か〜ら！一緒にあ〜そぼっ！」

どうしよ・・・誰かっ・・・

「だったら俺と一緒に遊んでやろうか？」

・え？

男に肩を掴まれてる私のすぐ真後ろで聞き覚えのある声がした。

でもその声が・・・

私は信じれなくて後ろを振り向く。

すると、男の手を取り見据えるハルの姿がそこにあった。

な・・・何で？

何でハル・・・が??

そんな私を余所に男とハルは言い合う。

「俺、この人の身内なんだけど。連れてくなら覚悟決めてくんないかね？」

そう言いながら男に詰め寄る。

その姿が凄く迫力有り過ぎて・・・

怖い。

男も迫力負けして“チッ”と舌打ちをし去って行った。

ハルはそのまま静かに私の方を振り返る。

私は突然のハルの登場に戸惑いながらも
助けて貰ったお礼をハルに伝える。

『あ・・ありが「何してんだよ！！！」』

お礼を言おうとした私の言葉を遮りハルが私を見て怒鳴った。

「何してんの?!こんなトコで女1人！」

『ご・・ごめんなさい』

「ナンパされたくてココに来てんの?!隙だらけだから声掛けられるんだろ?!」

は?!・・・酷い!

『ナンパされたくてココに来てるわけじゃないっ!!!』

ナンパなんかされたくない。
そんな為に来てるわけないじゃん!

「じゃあ何の為に来てんの？」

怒ってるのかめちゃくちゃ冷たい声。

『何の・・・て』

・・言えるわけない。
ハルを感じたいからなんて。

何て答えていいか、なかなか答えない私にハルは鼻で笑ったように

「尻軽？」

と言った。

・・酷い。
酷過ぎる!!

『・・・何で。』

「は？」

『何でそんな事言われなきゃいけないの？
何でそんな事しか言えないの？！
だったら最初からほっとけばいいでしょ！！』

言いながら悔しくて涙が出る。

「ごたごたうるせー！！」

私の反撃も“ごたごた”の一言で片付けられる。

それが更に悔しさを倍増。

そんな私の感情を一切無視して、数時間前にハルに掴まれた場所を再度掴まれ引っ張るようにして歩き出す。

『ちょ・・・！離してよ！』

「黙れ。」

ハルの腕を振り払おうとするも、力を込めて握られ不可能。

そしてまたも一言で片付けら沈黙。

泣きながらハルが掴む手を見つめる。

・・・痛いし。

もう。

手も・・・心も凄く痛いし。

ハルに掴まれてる腕を見ると余計涙が止まらなくなり
家に着くまで涙が止まらなかった。

その間ハルは手の力を弱める事も強める事もなく
一定の力で握ったまま私の1歩前を歩いてた。

・・・こんな状態なのに。

怒られ怒鳴られ引っ張るように掴まれてるだけなのに。

“このまま・・・”

なんて思ってしまう。

“このままでいいからもう少し・・・”

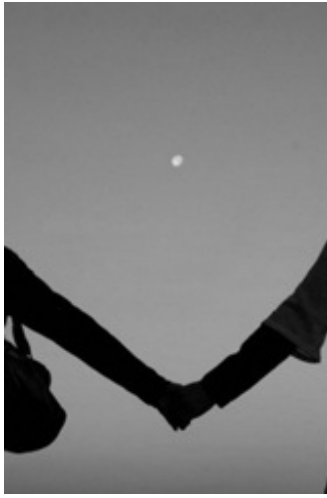
なんて思ってしまう私はバカだろう。

何故あの場所にハルが来たのかという疑問よりも

今こうして繋がれてる腕の事の方が私の中で重大性が大きく

こんな状態でもいいから、時間が止まれば・・・

って思いながらハルの大きな背中を見つめた。



-----

相変わらず変わってねえなあ〜。

2年前と全く変わらない。

変わるとしたら今は昼間と言う事か。

俺は久々に蛍との思い出の海に来た。

いつも2人で座ってた場所に腰を下ろす。

すっかり降ってた雨も止み、
時々雲の隙間から太陽の光が海面に降り注ぎ、
ちょっとした映画のワンシーンのような風景が広がる。

太陽の光でキラキラ輝く海と変わって

俺の心はドロドロ。

輝きなんて全くない闇そのもの。

抜け出したいのに

抜け出す手段さえ掴めない闇。

俺が蛍と再会した初日

目を涙で腫らして部屋から出て来た蛍。

俺のせいで・・・。

蛍の傍にすぐさま行って抱き締めたかった。

でもそれは許されない。絶対に。

その感情を消し去るために君に暴言を吐く。

自分の理性を守るために君に裏腹な言葉を吐く。

誰よりも君に俺の名前を呼んで貰いたいの。

誰よりも蛍に名前を呼ばれたいの。

それを俺自身で阻止する。

その夜は目の腫れた蛍の事と
もう2度と“ハル”と呼ばれない寂しさで寝る事が出来なかった。

次の日全く寝れず仕舞いで眠たさMAX状態でリビングに行った瞬間

俺の睡魔はぶっ飛んだ。

だって・・・あまりに蛍のスピンが可愛かったから！

それを悟られないように無造作に座ったけど・・・

チラチラ気付かれないようにスピン蛍を堪能。

やべえ。

マジ可愛い！

朝から天使をありがとう！神様。

内心心の中テンション上久の俺に凄くか細い声で

「遥人君」

と君が話かけた。

か細く、どこか怯えた声。

あの透き通る綺麗で心地良く耳に響く声の君から想像も出来ないくらい細く小さな声。

何とか耳を澄ませてようやく俺の耳に響いた言葉は

“ハル”

ではなく

“遥人君”。

さっきまでのテンションは何処へやら・・・。

一気にテンションは地に落ちる。

俺に朝食食べたい方を聞いてきたけど

俺は君の手料理が食べられる？！

って

さっき落ちたテンションもまたまたアップ！！

THE 単純男バンザイ！

君の手料理が朝から食べられるなんて嬉しくて

嬉しさに輪をかけて

何だか朝から同じ物を食べて同じように君と感じたかったから

俺は君と同じ物を選択。

誰にも気づかれず密かに君を感じながら君と同じ物を共有する幸せ。

これくらいの小さな幸せ

許される・・・よな？

俺の目の前に広がる君の手料理。

オムレツ・サラダ・パンプキンスープ

毎朝パンとコーヒーだけの俺からしたらすっげー豪華な朝飯！！

毎日こんな食ってんのかと思うと兄貴がうらやめしい（羨ましい+恨めしい）・・・。

一口オムレツを口に運ぶ。

『・・・旨い。』

ごくごく普通のプレーンオムレツだったけど旨い！！

俺はつい素直な感想がポロツと出る。

はっ！！と我に振り返ると君を見ると

君は少し嬉しそうに俯いてた。

俺は何だか・・・何だか少しだけ

今だけはすこーしだけ君と通じ合った気がしたんだ。

だけど。

どんな事を俺が勝手に感じたって

どんな事を俺が勝手に思ったって

君は兄貴の嫁なワケで。

玄関先で兄貴を見送る君が兄貴にキスされてるトコを運悪く目撃。

兄貴と蛍は結婚してて、俺がその家に転がり込んでるだけ。

だからいつかこういう場面も目撃するだろうと日本に帰ってくる時覚悟してた。

つもりだったけど、いざ目撃すると何だろう・・・。

何とも言えない感情が湧いてきて

俺は気が付いたら蛍をこの腕の中に抱き締めてた。

俺の腕から逃れようとバタつく蛍を
俺は逃がさないようにギュッと力を入れ抱き締める。

俺の体に蛍が埋め込まれるかのように力いっぱい抱き締める。

君の体に俺が埋め込まれるかのように・・・。

兄貴に全て囚われないで！

俺も君の心に居たい・・・っ。

そう思った時、君の体の力がふっと抜けた。

その瞬間、俺は我に戻った。

俺は・・・何をしてるんだ。

自分がした最低な行為を誤魔化すように
最低な言葉で消してしまおうとする最低な俺。

俺はその場を逃げるように去った。

まだ腕の中にさっきまでの君の温もりを感じながら・・・。

兄貴への嫉妬・妬み
蛍への愛情・嫉妬
自分自身への僻み・嫌悪感

行き場のない感情をぶつける場所を探し・・・

今に至る。

俺はどうしたいんだろうか。

俺はこのままだと蛍を壊してしまうかもしれない・・・。

もしまた今日みたいな突発的な行動に出ってしまったら

俺は自分を止める事が出来るのだろうか。

理性を失わず済むのだろうか・・・。

結局海に来ても気分も何も晴れないまま足取り重く家に向かう。

はあ・・・。

家へと続く階段の下で小さく溜息。

意を決して階段を上ると同時に上からぱたぱたと下ってくる足音が。

俺は止まって足音の主の出現を待っていると・・・

蛍だった。

何か急いでる様子の蛍。

な、何だ？

こんな時間にどこ行くんだろ。

君は俺を睨みつけ横を通り過ぎて行った。

君が俺を睨むって事は・・・

『はははは・・・・。』

俺を嫌いになったって事だなと思うと何だか笑いが出た。

とうとう君に嫌われたんだ。

好きで好きでしようがない人に俺は嫌われたんだ。

そう思うと涙が出そうになったがグッと我慢する。

俺は絶対2度と泣かないと決めたから・・・。

・・・それにしても。

何だかさつきから胸騒ぎがする。

気のせいか・・・？

俺は一旦は家に帰ろうと階段を1歩上がるけど
すぐ踵を返し蛍を追った。

蛍を必死に追いかけて彼女にバレないように後ろを着いて行く事1時間

小さな山の上の公園に着いた。

・・・何だ？ここ。

別に何も無いただの小さな公園。

その中に入って最初から決めてたように
奥の小さなベンチに腰掛け空を見上げる蛍。

日も落ち夜空には星が煌めく。

それをただただ静かに眺める彼女。

それを眺める俺。

ふと初めて蛍と出逢った日を思いだした。

初めて見かけた時もこんな感じで蛍を見てたっけ。

何だか懐かしく、幸せな気持ちになり思わず顔にも笑みが浮かぶ。

懐かしい思い出を思い出しながら
月灯りに照らされ、あの時感じたように

綺麗だな・・・。

と蛍を見ていた。

———その時

蛍の背後に1人の男が近づくのが見えた。

・・・何だ？あのヤロー。

知り合いなのか？

でも何か様子が・・・。

！！！！

アイツ！！
蛍に触りやがったっ！！！！！！

俺は急いで蛍の元へ走って行き蛍の背後から男の腕を掴みあげた。

どうしてやろうか？

蛍を触ったこの腕、どうしてやろうか。

へし折ってやろうか。

粉々にしてやろうか。

俺は掴む腕を自分の握力を最大にして握る。

男は何やら言ってるけど
蛍を汚い手で触った怒りで俺の耳には何も入らない。

俺は男を見据えながら出来るだけ蛍から離し一言
“失せろ”
と言うと男はバカ面で逃げて行った。

バカが！
次蛍を触ったらマジで手砕いてやるっ！！！！

俺は蛍に目を向けると怖かったのか少し震えていた。

その姿を見て安堵感が生まれる。

蛍に何もなくて良かったあ・・・マジで。

俺が居なきゃ蛍は今頃・・・なんて考えるだけでゾッとする！！！！

なんて思うと今度は蛍にもイライラが・・・。

俺が居なかったらどうなってたと思ってんだ？！！！！

そう思うと同時に俺は蛍を怒鳴りつけてた。

俺にビビってんのか、
さっきの男にビビってんのかオドオドしてる蛍。

そんな事今の俺にはどうでも良かった。

分かって欲しかったんだ。

女が1人こんな時間にこんなところに居る事は危ないって事。

もう少し自分に自覚を持って行動して欲しいって事。

何かあってからじゃ遅いんだぞ？って事を。

君は泣きながら反論してきたけどそんな物俺の耳には入らない。

てか反論なんかさせない。

こんな危ない場所2度と1人でなんか来させないんだからなっ！！！！

俺は泣く蛍の手を引っ張り家まで連れて帰った。

最初抵抗した蛍も抵抗を止め黙って俺の後ろを着いて歩く。

たまに君に気付かれないようにチラッと横目で君を見ると
まだ泣いてるのか俯いたまま。

俺があんな怒鳴ったから俺が悪いんだけど・・・
そんな君を見てると心が痛い。

ホントは君を慰めて抱き締めて

『もう大丈夫だよ』

って言ってやりたいのに。

そして男が触った場所を
俺が沢山その場所にキスを落として消毒してやりたいのに・・・。

怒りの次はやるせない気持ちが俺を襲う。

俺は彼女を傷付けるだけで
何の役にも立たない男だ・・・。

そう俯いた時

前方から

「お！ 遥人じゃないかっ！！」

と俺を呼ぶ兄貴の聲がした。

俺は咄嗟に掴んでた蛍の手を離し兄貴に手を振る。

「どうしたんだ？ ・ ・ ・ って蛍も一緒？」

「うん。お帰りなさい。
ちょっとコンビニ行くのに遥人君に着いて来て貰ったの。」

と蛍が兄貴の方に移動し嘘の説明をする。

俺自身もさっきの件を説明するよりこの方がいいだろうと察し話を合わせる。

『そうそう。アイスが食べたかったんだって！』

「そっか。蛍う、腹減った！」

「う、うん。家入ろ！」

遥人君ありがとうね。」

そう言って蛍は兄貴と階段上がって帰って行った。

“遥人君ありがとう”

君からの感謝の言葉が何度もリピートされる。

“ありがとう”

俺は君の役に立ったの・・・？

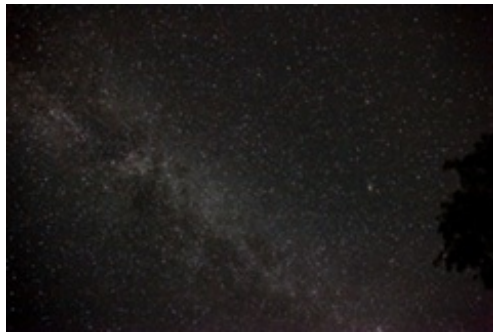
嬉しくて思わず小さくガッツポーズする俺。

何の踊り？てな軽いステップ踏んでしまう俺。

朝は闇にドッキリだった俺もたった一言で這い上がる単純な俺。

もう少し小さな小さな幸せを噛み締めていたくて俺は1人星空を見上げた。

そこにはいつの間にか雲が一切なくなり
満天の星空が広がって素晴らしく綺麗に輝いていた。



それから数日何ら変わらない日々を過ごしてた。

相変わらずハルは私を“アンタ”
私は“遥人君”

義姉とは呼ばれなくなったけど世の中

義姉にアンタ呼ばわりする奴もどうなんだ？

とたまに疑問に思うけど。

何となくアンタの方が距離は短いかなと思ったりしてそのまま
アンタと呼ばれる私。

だいぶハルが居る生活にも慣れて来て

朝とお風呂上がりはブラジャーを自然に着けるようになったし
スッピンも別に平気になってきた。

慣れて怖い！

このまま色々な事に慣れて行くんだらうか・・・

ハルの事

このまま自然と義弟だと心が認識するようになるんだらうか・・・

こゆ事も慣れて行くんだらうか・・・？

「ご馳走様！今日も旨かったよ啗！」

『そう？それは良かった！』

「じゃあ遥人！続きしようぜ！」

「はいはい。どうせ負けるくせに。」

「次は絶対勝つ！！」

「はいはい。」

今日は珍しく雅人の帰りが早く
何のスイッチが入ったのか2人でトランプ大会が繰り広げられていた。

見てる限りでは雅人が負けてばっかみたいだけど・・・。

2人揃えば賑やかに何かやったりして
凄く仲がいいんだな～と思いつつ夕飯の片付けを始める。

「ご馳走さん」

とハルが流しまで空いた食器を運んでくれた。

『あ・・・ありがとう。』

私の言葉に何の反応も返しては来ないけど
ハルは食器は下げてくれ、毎食必ず

“ご馳走さん”

と一言だけ言ってくれた。

それだけでも私の心は満たされる。

「よし。オセロしようぜ！」

「はあ？トランプじゃねーのかよ！」

「トランプは止め！お前に勝てんから勝てそうなのをするっ！」

「・・・兄貴、大人になれよ。」

呆れるハルを無視してオセロの準備を始める雅人。

意外と勝負師だったんだな・・・。

なんて2人を眺めつつコーヒー飲みながら暫し休息。

「あ！蛍、俺にもコーヒー！」

はいはい。

あれ・・・ハルはいるのかな。

『遥人君は？』

「うい～。」

ハルの“うい～”はYES。

ありがとうもたまにこれで済まされるから
多分彼の中で色々使い分けれる言葉なんだろう。

その内全てが

“うい”

になったりして・・・。

無理無理。
分かんない自信100%。

「はい、ここ置いとくね！」

ミニテーブルに2人のコーヒーを置く。

雅人はブラック。
ハルはミルクと砂糖多め。

「サンキュー！」

「うい〜」

それぞれから、それぞれ予想通りの返事。

裏切らない君達に逆にありがとうだよ。

「そだ！これ賭けようぜ！」

「卑怯じゃん！兄貴っ！勝てるからって！」

なんてギャーギャー正直煩い。

2人に付いて行けず朝も早かった私は先に寝る事にした。

『じゃあ私先に寝るね？』

の報告も虚しくオセロにムキな2人には耳に届かなかっただらしい。

ほっとこ。

私はベッドに入り込んで目を閉じた。

----- . .

「蛍・・・寝た？」

『ん・・・』

あれから何時間経ったんだろ。

いい感じに寝てたのに雅人に起こされ少々不機嫌な私。

「寝てた・・・よね？」

・・・。

見たら分かるだろ？！！

と喉まで出かけたけどグッと堪えて

『何？』

と返す私。

「いや・・・俺、明日泊まりで仕事なんだ。」

『そっか。分かった。』

と返すけど頭の中爆睡状態。

そのまま睡眠に再び入る。

ハズだったんだけど・・・。

—————ん・・・何か・・・。

眠さと闘いつつゆっくりと目を開ける。

え？

ちょちょちょちょっと？！

眠さも一気に吹っ飛び完全に目を覚ます。

だって

雅人が上に乗り首筋にキスをしながらTシャツの上から胸を触っていたから！！！！

『ちょ！雅人？！』

やだ・・・！
向こうの部屋にハルが居るのに！

『ちょっと止めてよ！』

私は雅人を押し退けようと両手で阻止する。

「やだ。」

一言だけ返し雅人は止める気配なくTシャツの裾を捲り直接胸を触ってきた。

・・・やだ。

ハルが居るのに・・・。

ハルに聞こえちゃう・・・！！

『止めてっっ！！！！』

私は声と同時に雅人を思いっ切り突き飛ばした。

「ほた・・・る？」

突き飛ばされた事に驚いてる雅人。

あ・・・。

『あ・・・！いや、ほら私眠たいし！
それに向こうに遥人君居るし』

と軽く笑いながら誤魔化す。

でも、雅人は私の上に跨ったまま真っ直ぐ私を見下し

「なんで？いいじゃん。俺達夫婦なんだし？」

と無表情。

ううん。

目が・・・怖い。

な・・・何？
何かいつもの雅人じゃない・・・。
何か・・・変。

『ま・・・まさ「なんてな！

冗談！」

へ！？

「明日俺早いから寝るわ！おやすみ」

と雅人は笑って軽くチュッとキスをし私に背を向け目を閉じた。

そこにはいつも通りの彼の姿があった。

『おやすみ』

と私も雅人に返し背を向け目を閉じる。

・ ・ 何だったんだろ。
さっきの雅人 ・ ・ 。

私が思いっきり突き飛ばしたからだろうか。

・ ・ 私が雅人を拒絶してしまったから。

拒絶された雅人のさっきの表情が浮かぶ。

悲しそうでビックリしたような・ ・ 。

でも・ ・ 向かいにハルが居るのに。

じゃあ、今ハルが留守にしたら雅人を受け入れるの？

雅人を受け入れられるの??

雅人を拒絶しないの？

私は・ ・

雅人を受け入れる事が今の私に出来るのだろうか。

再びハルに逢えた今

雅人を受け入れられるのだろうか・ ・ ・ 。

自問自答繰り返しながら答えを出す前に
私は再び深い眠りについた。

翌朝目を覚ますと既に雅人の姿はなく、変わりに1件のメールが届いていた。

TO：蛍

件名：おはよう！

本文：蛍、昨日はごめん。

きっとトランプも結局オセロも遥人に負けてイラついてたんだと思う(笑)

だからゴメンな？

明日終わったらすっ飛んで帰るから待ってて。

雅人

ほほう・・・

負けた腹いせでの行動だったというワケか。
雅人君。

朝から全然笑えませんけど？

でも・・・

昨日の雅人の様子がゲームが関係してるだけなら良かった。

うん。

もう我が家でゲーム禁止！！
ったく。

今日はハルも朝早かったみたいで誰も居なかった。

あ。

ハル・・・夕飯いるんだろうか。

ってか今日夜居るんだろうか。

どっちなんだろう・・・。

今日は雅人居ないし・・・正直まだ2人きりはキツイなあ・・・。

当然まだ気まずさは変わってないワケで。

会話もただ一言返事が返ってくる程度なワケで。

目すら合わない日もあるワケで。

いつもは気まずくなかった時にタイミング良く雅人が帰宅したりしてたけど
今日はそれもないワケで。

どどどどうしようっ。

今から想像するだけでテンパる！

取り敢えず今確定してる事。

気まずさ100%空間の夜が私を待ってるという事。

オーマイガー！！！！！！

なんて思いながら私は職場に向かう。

週3回私は近くの雑貨屋さんで働いていて、今日は出勤日。

カントリー雑貨が大好きで。

結婚前からここで働き、今も辞めずに続行中。

いつもは雑貨達に癒されながら働くのだけど今日は別・・・。

ずっと頭ん中

夜どうしよう・・・。

ってそればかりがぐるぐるぐるぐる・・・。

ああ。

考えすぎて緊張しすぎて胃が痛い。

——なんて思ったりしてても
時間は刻々と迫ってくるもので。

結局1日中ハルと2人きりになった時の事を考えてしまった・・・。

何だかそのまま真っ直ぐ帰りたくなかった私はCDショップに立ち寄った。

ただあまり早く帰りたくなかっただけで寄ったからぶ～らぶら

必殺。見てるだけショッピング。

その時1枚のCDが目にとまった。

凄く何だか不思議で
何だか幻想的で
凄く凄く私の好きな雰囲気の1枚。

そして結構好きなアーティストさんのCDだった。

思わず手に取りそのままレジでお買い上げ。

どんな曲なんだろう・・・。

帰って早く聴こうっ!!!

CDを衝動買いする事自体が最近では凄く自分の中では珍しく

あれだけ悩んでたハルの事もすっかり忘れルンルン気分で帰る。

我ながら単純。

帰宅すると既にもうハルは帰ってるみたいだった。

『あ・・ただいま。』

「うい〜」

さっきまですっかり忘れてた不安要素が一気に降りかかった瞬間。

私は急いで夕飯の準備して出来た物からテーブルに並べる。

ハルも様子見ながら、そろそろかと思った時色々準備してくれた。

『い・・いただきます。』

と2人向き合っていざ夕飯!

『「・・・・。」』

おお。無言。

『あ・・あの今日朝早かったんだね』

頑張って喋ってみる。

「あ?・・ああ」

・・・・。

『あ・・終わるの早かったんだね』

再度チャレンジ!!

「ああ」

ほほう。

“あ”の活用方法が良く分かります。

うん。

降参！

その後ひたすら無言で食べる2人。

先にハルは食べ終わりさっさとお風呂に。

私はというと・・・。

『ぶはあ～～っ・・・』

全身脱力で思わずテーブルに伏せる。

もう・・・嫌だ。
めっちゃ疲れたじゃん！

でも
毎回何を作っても凄く綺麗に食べてくれるハルの開いた食器を見て
ちょっと心も晴れた。

そだ！

早く食器片付けてCD聴かなくちゃ！！

私は急いで洗い物を済ませ
コーヒーを入れくつろぐ感満載でソファに座った。

とその時ハルもお風呂から上がりリビングに入って来た。

『あ。何かテレビ観たい物あったりする？』

「いや？」

『じゃあCD聴いてもいいかな？』

「うい～」

あ・・・

ここは“うい”なんだ。

ハル語は難しい。

CDをケースから取り出しセットしてる間にハルはソファにドカッと座った。

え・・・と？

あなたもお聴きになるのですか？

それはちょっと想定外。

『・・・コーヒー入れよう・・・か？』

「いいよ。自分でやる」

はあ。

ハルは黙ってコーヒーを入れ戻って来てまたドカッとソファに座る。

私は小さく床に座る。

「そっち座れば？」

とハルは自分が座ってる反対側の空いてるトコを差す。

『あ・・・ありがとうございます。』

と私はチョコンと座った。

どっちが居候なんだか。

「何のCD買ったの？」

『えと・・・』

と私はCDのケースを見せた。

「ふ～ん・・・好きなの？」

『いや・・・デザインが気に入って？』

「なんだそれ」

『・・・・。』

自分で聞いてきた癖に鼻で笑って返すって失礼じゃん！

と言ってやりたいのを我慢し再生を押す。

♪～

あ。

私の好きな雰囲気のメロディーだ。

私は目を閉じてじっくりと聴き入る。

・・・・あ。

なんだかこの曲って・・・・。

その曲は凄く、凄く切なくて。

【あなたに名前を呼んで欲しくて

あなたにもらった物全て愛だと知った

から】

この部分が凄く自分とリンクしてて。

私もハルに“蛩”って呼んで貰いたくて・・・。

愛だと知って・・・。

「おいっ！」

・・・・？

「何で泣いて・・・・」

『え？』

ハルに言われて思わず自分の頬に手をやると涙が。

『あれ？曲に感動して泣い——。』

へ？！

私が喋り終える前にハルがギュッと抱き寄せた。

『え？あ、あの！』

もしかしてまた前みたいに貶すつもりじゃ・・・！！

私は力を入れてハルの手を自分から離す。

でもハルの力は強くて。

ハルは耳元で以前とは違う優しい声で

「泣くなよ・・・。」

と言った。

「・・・頼むから泣くなよ・・・っ」

え・・・ハル・・・？

『は・・・はる「じゃあ、俺寝るわ。じゃあな！」』

私の言葉を遮るようにハルは自分の部屋へ戻って行った。

私は状況が掴めず暫く茫然。

でも・・・

“泣くな”

そう言ったハルの声
抱き締められた温もり
ハルの匂い

それらが切なさを更に倍増させ
私の涙を更に増やしていく。

ハル・・・。

ハル・・・。

ハル・・・。

ハルのせいで余計心が痛いよ・・・。

遥人side

あれ？
誰も居ない？

あ・・・蛍は仕事か。

にしても今日は疲れた。

早朝突然携帯で呼び出されバタバタと出勤したから
朝の蛍見れなかったなあ・・・。

スッピン蛍。

なんて思いながらソファに横になる。

公園で泣かせて以来
蛍とは必要以上の会話をする事もなく。

本当は沢山話したいのに・・・。

本当は真っ直ぐ蛍の目を見て彼女の話を見つめて笑顔で
ずっとずっと聞いていたのに。

チラチラと見る事しか出来ない俺。

ヘタレな俺。

この状態もあと半月。

それまで俺は保つ事が出来るのだろうか。

それまで俺は蛍の前できちんと“義弟”を演じきれんのだろうか・・・。

と、その時

「ただいま」

蛍だ！

俺はソファに座り直しテレビを見てるフリをする。

・・・って。

別に横になってるままでも良かったのか！

蛍は無言でイソイソと料理を作る。

『俺も手伝おうか？』

って言いたいのにその一言が出せない。

ああ・・・

蛍の横で一緒に楽しく作れたらどんなに幸せだろう・・・。

それは叶わない・・・。

だったらせめて。

俺はタイミングを見計らって箸やら準備を手伝った。

「あ・・・今日雅人のいないよ」

『飲み会かなんか？』

「ううん。今日泊まり」

は！？

泊まり・・・

俺。

今日蛭と2人きり！？！？

ままままままままじで！？

『何で！？』

「へ？何でって・・・仕事？」

ですよね？

そりゃそうですよね？

仕事以外ないですよね？

ああ。

こんな時こそ1番自分の立場を呪う・・・。

でも・・・昨日兄貴泊まりみたいな事言ってたっけ？

まあいいか。

俺は取り敢えず蛍の斜め前に座り蛍の手料理を食べる。

どれもこれも毎回旨いんだけど。

今日はヤケに2人を意識してしまうみたいで

俺、完全上の空。

だから蛍と会話どころじゃなくて殆ど無言で夕飯終了。

くそ。

意識しまくりじゃん俺！！

ダメだ。
頭冷やそ。

俺はシャワーの温度を最大限下げて浴びる。

こんな時真夏で良かったと心から思う。

冷水に打たれながら何度も何度も自分に言い聞かせる。

俺は義弟だ

俺は義弟だ

俺は義弟なんだ

蛭は兄貴の嫁さんなんだ

もう俺のモノにはならない人なんだ。

そう何度も何度も言い聞かせリビングに戻った。

「あ、テレビ観る？」

といきなり蛍が聞いてきた。

何だ??

良く聞くとどうやら買ってきたCDが聴きたいという事だった。

ふ～ん。

どんなCDなんだろう。

買ってきた張本人に聞いても
曲自体聴いた事がないらしく雰囲気を買ったらしい。

何だよ雰囲気って。

そういう所が蛍らしくて笑いが出る。

俺もこのアーティスト嫌いじゃないし聴いてみたくなってソファに座った。

蛍は床に何故かちょこんと座る。

その姿が妙に可愛くて

そのまんまそこに座ってて欲しい・・・

なんて思ったりしたけど可哀想だしソファに座るよう勧めた。

けど、どっちにしる蛍はちょこんと座った。

可愛すぎ。

なんて蛍を横目で見つつ

コーヒーを啜りつつ

蛍の買ってきたCDを聴く。

・・・何だこの曲・・・。

今の俺そのまんまじゃん・・・。

全てそのまんまじゃん・・・。

歌詞全てが自分とリンクしてスッと心の中に入ってくる。

やべ・・・俺泣きそう・・・。

俺はふと蛍の方に視線を流す。

すると

蛍は泣いてた。

まさか……！

まさか俺と一緒に曲を聴いて？

俺と同じ想いで泣いてるの？

俺の事……嫌いなはずなのに何で……っ？！

そう思ったら俺は居てもたっても居られなくなり君を俺の腕の中に抱き締めた。

君は俺から離れようともがくけど俺は更に力を入れそれを阻止する。

泣かないでくれ……。

『泣くなよ……頼むから』

自然と言葉が漏れる。

頼むから泣かないでくれ……。

君が泣くと俺は……

俺は

義弟を上手く演じれなくなる……。

——ダメだ。

このまま君を抱き締めていたら俺は戻れなくなる。

君の“義弟”の席に・・・。

俺は蛍から離れ自分の部屋へ行きベッドに身を投げた。

リビングからは君のすすり泣く声が聞こえてくる。

俺はそれを聞かないように枕で頭を覆い聞こえないように耳を塞ぐ。

俺だって・・・

俺だってもう1度君にあの頃のように名前を・・・

ハルって・・・

君の優しい声で

ハルって呼んで欲しいよ

俺も君の名前を呼びたいよ

蜚って・・・。

俺は抱き締めた君の温もりを確かに感じながら

堪らず声を押し殺し静かに泣いた。

——・・はう。

結局一睡もできず・・・。

でも昨日はほんとすごくすごく泣いてスッキリ気分の私。

ハルが現れても雅人が居るしあまり泣けなかったってのもあるけど・・。

昨日はハルの優しさもプラスしたせいか
あんな泣いたのは子供の時以来じゃないだろうか。

でも

だからこそ色々。

本当に色々自分の中で整理出来た事もある。

昨日抱き締められた事は私の中では全然・・
と言ったらウソになるけどあまり気にしてない。

きっと慰めてくれただけだから。

だからそれ抜きで自分の中で色々整理出来たし。

たっくさん泣いたしスッキリ！！

気分晴々爽快MAXだっ

清々しい表情で勢いよくリビングへ繋がる扉を開け放つ。

と

丁度目の前にハルの姿が。

『うわぁ！』

「うわっ！！」

私は目の前のハルにビックリ。
ハルは勢い良く開いた扉にビックリ。

『お・・おはよ！』

「おう」

相変わらず目を合わさないハルの返事は
“うい”から変わって“おう”に変化。

なんか意味があるのかな？

ハル語。相変わらず理解不能。

そのままハルはいつも通りの定位置へ座り大あくび。

ウチに来て毎日あのスタイルは変わらないからもう癖なんだろうな・・・

2年前には知る事もなかった色々な癖が
ここに来て知る事が出来てそれはちょっと嬉しかったり。

ちょっと心がほっこりする瞬間。

痛いばかりだった心もちょっと回復？

なんてちょっとした朝の小さな幸せを満喫していると携帯が鳴った。

着信音は昨日購入したCDの曲
“Dear”

昨日あれから携帯に取り込み着信音に設定した。

切ない曲だけど・・・何だか私は元気が出るから。

何だかハルの温もりを感じれるから・・・。

『もしもし?』

「あ、蛍おはよ！」

『どうしたの?』

「今日仕事終わったら外で飯食べよう!!」

『え? いいけど?』

「じゃあ決まりっ! 19時に会社前で」

『はい! じゃあね』

やった!
今日は夕飯作らなくていい!!

私はルンルン気分で電話を切った。

・・・って。

そういえば。

ハルはどうするんだろ?

「電話兄貴?」

『うん。あ、今日外でご飯食べるんだって!』

「あ～さっき電話かかってきて聞いた。俺はパス。」

『電話掛かってきたんだ?で、パスなんだ?』

「うん。人と会う約束してるから。」

人・・・ねえ。

って彼女でもなんでもないので勘ぐる私って!

はははは・・・はあ。

「ご馳走さん」

とハルは食器を下げバタバタと準備をし出勤していった。

そんなハルを見て毎朝思う事。

それは・・・

あの朝ボーッとテレビ前で何度も大あくびする時間を他用意する時間に充てれば良いのにな。

って私も時計見ると出勤時間が！！！！

はい。

朝からハルの事を色々考える

題して
【恋する春（ハル）時間】
！！

お。

我ながら上手い！

なんて無駄な事考えてる時間を別に使えばいいんだよね。

今日は美樹ちゃんと同じシフト！
それだけに仕事の時間がかなり楽しい。

美樹ちゃんは唯一ハルと雅人の事知ってる親友だから
何かと気にかけてくれる。

『美樹ちゃんおはよ！』

「お～！出たな？！恋する新婚娘！！」

出たなって。
妖怪か！

『出たなって・・・』

「で・・・その後どうなってんの？」

『どうって・・・別に。』

抱き締められたけど・・・別に。

「ったく。世界中沢山男居るのに何で兄弟だか。」

そう言って頭を横に振りながら呆れる美樹ちゃん。

そんなの。

私が知りたいよ！

「で・・・どうすんの？」

『どうって・・・別に・・・』

「は!？」

雑貨を並べながら店内に響き渡るくらい大声で一言発声。

客いなくて良かったね!美樹ちゃん!!!

『プッ!デカいし!』

思わずおかしくって笑いが出る。

「笑ってる場合か!」

はい。すみません。

「あれだね。蛍の今からの道って

行くも選ぶも茨の道だね。」

茨の道・・・か。

美樹ちゃんの言う通りかもね。

『そうだね。』

「兄弟だからね・・・難しいけど。」

でもいつかは結局どちらか自分の心に決めなきゃ。

雅人君にも失礼だし何より自分に失礼だよ。」

『でも・・・ハルはもう私の事なんて・・・』

「ね？いつもそうやって逃げてるから
大事な時に大事な物逃がして後悔するんでしょうが。」

バカが。って言い捨てる美樹ちゃん。

そうだね。

ホントその通りだね。

今日はその通りな事ばかり言われて何も言い返す事も出来ず

ほぼ叱れる子供のように小さくなりながら働いた私。

美樹ちゃんの手紙が一つ一つが心に響く。

「ってか、今日雅人君と食事でしょ？もう行かなきゃ！」

美樹ちゃんの声でふと時計を見上げると17時を回ってた。

『あ！ホントだ！』

「ほら。さっさと行っておいで！」

『うん。ありがとう。』

「この際、遥人君にも抱かれて良かった方を取るとかってのもアリかもね？」

ってニッと笑う美樹ちゃん。

あんた・・・なんてことを。

ギャハハハと笑う美樹ちゃんに手を降って私はお店を後にし
雅人の会社へ向かった。

行きの電車の中

美樹ちゃんのことをふと思い出す。

ハルに抱かれる・・・。

って！危ない危ない！

頭の中破廉恥状態になるトコだった！！！！

「蛍！こっちこっち！！！」

10分前くらいに雅人の会社下に着いたのに
もう既に雅人は待ってたみたいで私を見つけ駆けて来た。

『ごめん。待った？』

「いや！じゃっ行こうか。」

と決まった場所があるようで歩き出す。

私も雅人の後ろを着いて歩く。

『どこ行くの？』

「ん？もう決めてあるんだ。」

と何故か得意気な顔。

『何処に行くの？』

得意気な顔はいいから行き先教えてください・・・。

「蛍の好きな所。」

あ。

あの店・・・かな

『イタリアンの？』

「そう！当たり。」

とニカッと私を見て笑う。

私と雅人が初めてデートしたお店だ。

そのお店は黒と白基調のお店で。

外では綺麗な庭園が広がりライトアップされてて

定期的に噴水が上がりとても綺麗なお店。

そこの雰囲気は凄く気に入って何かと嬉しい時とかにはこのお店と一緒に来てた。

けど・・・何か嬉しい事あったけ？

『何かあったっけ？』

「全然？何もないよ？」

「^{ですよね？}
私も別に見当たらない。」

「でも一緒に行きたかったんだ。」

と優しく私を見て微笑んだ。

『ありがとう！』

「いえいえ！姫のためですから」

と笑いながら紳士のようにお辞儀をしてみせる雅人。

『うむ。苦しゅうない！』

なんていうやり取りをしながら私達は目的のお店に向かった。

途中、お店まであと少しってとこで急に雅人が細い路地に入って進路変更。

『え？どこ行くの？あっちだよ？』

私はビックリして雅人に後ろから声を掛ける。

「あ、ちょっとその前に行きたい所あるから。」

あ～。なんだ！

私も納得して雅人の後ろを着いて行く。

10メートル程度歩いた所で急に雅人が立ち止まり危うく背中にぶつかりそうになる私。

急に止まったら危ないっつの！！

焦って雅人を見上げると雅人は真っ直ぐ向こう側を見つめたまま

「あれ？遥人だ」

と呟いた。

私も雅人の視線を追ってみると

！！

そこにはハルと腕を組み楽しそうに笑う女性の姿があった。



え———・・・。

「なんだ。遥人の奴デートだったのか。」

・・・一緒に居るのは誰。

「な？」

何で・・・腕組んでるの？

「蛍？どした？」

雅人の声でふと我に返る。

『あ・・・ごめ・・・何でもない！』

笑ってごまかす私に“そっか”と笑って歩き出す雅人。

結局寄りたかった店の位置を忘れたかなんかで
そのまま当初の目的のお店に。

その間も食事中も雅人の会話に返事をしつつ

私の頭の中はさっきみた光景がずっと映し出されていた。

当然大好きなお店の空間も

大好きなお店の料理も堪能する事なく・・・。

今日会う人っていうのは彼女の事だったんだ・・・。

彼女居たんだ・・・。

朝のスッキリ爽快気分も夜に相応しいくらい真っ暗どんより気分になり再び陥る私。

自分には雅人が居るのに彼女が居るハルに落ち込むって・・・

最低だな・・・。

「なんか元気ない？」

自宅に着いて冷蔵庫からお茶を飲みながら
私の様子を察してか雅人が顔を覗き込んで聞いてきた。

『ううん！そんな事ないよ！』

「そっか。ならいいけど。」

言えるわけないもん。

ハルのデート現場見たから沈んでるなんて・・・。

そんな時玄関から音がした。

ハルが帰ってきたんだ・・・。

「お！遥人。お前あれからどうだったんだ？」

とニヤニヤしながら遥人に聞き寄る雅人に少々ウンザリ顔のハルが

「何が？」

と面倒臭そうに返答する。

やだ。

聞きたくないし！

『ちょっと私コンビニ行ってくるね』

「あ？ああ・・・」

ハルとじゃれながら話してた雅人が
ビックリした顔でこっちを向いて返事する。

私は飛び出すように家を出て

着いた先はまたあの公園。

前ハルにはめっちゃ怒られたけど・・・。

それでもここしか思いつかなくて。

私は今日も切ないくらい目の前に輝く星空を眺めながら気持ちを落ち着かせる。

いつもならここで星を眺めるとハルを沢山充電出来ちゃうのに今日は・・・

今日はなかなかハルが貯まらないよ・・・。

充電しようとするときさっきの女性と腕を組んで歩いて行ったハルの姿で
一瞬で赤ランプ点滅状態。

どれだけここで眺めてたら充電完了するのかな・・・。

「何回言わせんの？」

え？

突然聞き覚えのある声が背後から聞こえてきて思わず振り返る。

「前に言ったっしょ？1人でここに来るなって。」

そこには少し怒り顔のハルが
立っていた。

『ひい！』

またもや何で！！！！

2度目の登場
そして険しい顔に驚きビビる私。

「“ひい” じゃねーし。何でここに1人で来てんのかって聞いてんだし。」

笑顔1つ見せず私の方に歩み寄りその距離50センチ。

あ

元々笑顔なんて見せられませんけどね。

てか

君を充電してたとは言え
今君に直接会うのは酷です。

『何でって・・・別に。』

と返事をする私に一言眉間にシワを寄せて

「あ?!」

一々怖いっ！！！！

てか

そんな睨まなくても。

「ここで危ない思いしたの誰だっけ？」

『・・・私・・・です』

「1人で来るなって言われたの誰だっけ」

『私・・・かな？』

なんて。

テヘツとか笑ってみたりして。

当然ハルは一切笑わず。

「誰だっけ？」

『私です。』

余計怒られた感満載。

怒られるし彼女見るし。

せっかく朝からご機嫌だったのに。

「何で言う事聞けないの？子供でも1回言われたら理解するよ？」

腕を前に組み相変わらず冷淡な声で淡々と怒るハル。

理解してるし。

来るなって言われた事もきちんと覚えてるし。

だけど

だけど

ここしかなかったんだもん。

今の私に必要な場所。

彼女居るハルにとやかく言われたくないし！

だからっ

『ほっとけばいいでしょ。』

「はあ？」

私の一言で眉がピクリと動く。

『ほっとけばいいじゃん』

「ほっとけるワケねーだろ。」

“はあ” とハルは溜息混じりに答える。

それが何だか余計私には

切なくて

辛くて

腹が立つ。

『何で？何でほっとけないの？寧ろ私はほっといて欲しいのに！』

「いい加減にしろよ！！」

私の言葉にハルが怒鳴る。

「人が心配して来てんのにさっきから何なの？マジで怒るよ？」

ってもう怒ってるくせに。

心配してるってどっちで？

ハルとして？遥人君として？

蛍として？義姉として？！

女として？身内として？！

私は・・・

私はどの立場を望んでるの？

もう。

全てが苦しい。

『心配してくれなんて頼んでない！
私のことなんてほっといて！！』

なんて言う私を

「・・・もういいから帰るぞ。」

と言って腕を掴んで引っ張る。

『離して！！』

ハルの手を振り払いハルの顔を見る。

驚いたような

呆れてるような

怒ってるような

そんな顔で私を見下してた。

そんな顔で私を見ないで・・・。

・・・もうダメ。

限界。

『————・っ』

「え？」

『心配って・義姉として？』

「・・そうだよ。」

『私は義姉なの？』

“それ以上は言ったらダメ”

ってもう1人の私は心の奥で叫ぶ。

「さっきから何なの？いい加減にしないと本気で怒るよ？」

『何で・・怒られなきゃいけないの！
私はただここで貴方を感じてたかっただけなのに・・っ！』

『私はただ星が好きだといった貴方を感じてたかっただけなのに
何がいけないの?!』

と言いながら溢れる涙が頬を伝う。

ハルはそんな私を何も言わず
表情も一切変える事なく私を見つめる。

相変わらず心の中のもう1人の自分が

“もうダメだよ！これ以上はダメ！”

と何度も囁くけど

もう止まらない・・・。

『貴方は私を義姉だと言うけど私は1度だって「ダメだ。」

私の言葉に被せるようにハルが私の言葉を静止する。

『どうして?!?!』

叫びに近い声でハルに問い詰める。

それでもハルは静かな声で

「ダメだ」

と言うだけ。

私は・・・私の気持ちさえも言う事は出来ないの?!?!

『どうしてよ！私は義弟なんて1度も思った「それ以上」

え・・・？

「それ以上言った後の覚悟きちんと出来てんの？」

そうハルは私の目を真っ直ぐ見て問いかける。

・ ・ かく ・ ・ ご？

あれだけ溢れて止まらなかった涙もハルの一言で止まり
同時に一気に思考も停止。

そんな私にハルはもう1度静かな声で私に問う。

「その続きを言った後の覚悟はきちんと出来てるの？
全て覚悟した上で言おうとしているの？」

そう言われて私はハッ！とした。

覚悟。

そう。

全てを捨てるという覚悟。

今の私にその覚悟があるの？

雅人を捨て
家族を捨て
全てを捨ててハルの元へ行く覚悟

今の私には・・・・・。

今の私にはその覚悟はない。

じゃあ、何がしたかったの？

それはただ自分の今の苦しい感情をただ吐き出したかっただけ。

自分の感情をただ単に吐き出したかっただけ。

普通の恋ならそれも許されるけど

私の恋はそれだけじゃダメなんだ・・。

一時の感情で・・・。

ふとハルを見ると――

！！

ハルの表情もさっきまでの冷静な表情と変わり
苦渋の表情に変わっていた。

私はそこで気付いた。

私の一時の感情でハルも傷付けてしまったという事。

私はバカだ・・・。

大バカ野郎だ・・・。

ハルは分かってたんだ。

全部。

全部。

全部分かってたんだ。

私に何の覚悟もないって事・・・。

分かってたから

止めたんだ。

全てを理解し項垂れる私の腕を掴み

「ほら。帰るぞ。」

と引っ張り家路に向かう。

私は自分の情けなさで止まってた涙がまた再度溢れ出る。

そんな私に振り返る事なく
正面を向いたまま静かに私の腕を掴み
歩くハル。

そんな彼の背中に私は小さく

『ごめんなさい』

と謝る。

ハルは前を向いたまま

「もういいから。もう泣くな。」

と優しい声で言った。

私はハルの優しさで自分のバカさ加減を再認識させられ
更に涙が溢れ出て止まらなかった。

泣きながらハルの背中に向け心の中で

ごめんなさい・・・

ごめん・・・

ごめん・・・ハル

そう何度も呟いた。

「待った?! 遥人くんッ!」

と俺に声掛けてきたこの香水のきつつい女・・・誰?!

「じゃっ行こっか!!」

『ちょちょちょっ・・・あのっ』

戸惑いレベルMAXの俺にお構いなしに腕を組んでくる謎の女。

何だこの人!!

逆ナンか?!

俺は彼女の腕を離しながら

『あの・・・失礼ですが・・・』

何者か尋ねてみようと試みた。

すると状況判断の鈍さにイライラしたのかでっかい溜息1回吐いて

「何? お兄ちゃんから聞いてるでしょ?」

と再度俺に腕を絡めてニッコリ笑顔。

・・・ん?

兄貴？！

そうだ。

早朝兄貴から電話でこの時間ここで待ち合わせと言われたんだっただっ。。

で

この展開は何？！

『ちょっと待ったっ!!!』

俺は再度この女性の腕を解き5歩程度歩いた脚を静止する。

『じゃ、じゃあ兄貴待ってないと・・・』

と言いつつまた5歩戻る。

-----と。

あれ。

あそこにいるのって・・・

兄貴と蛭??

「あ、見ちゃった？」

『え?』

「雅君とお嫁ちゃん。見ちゃった？」

何・・・だ？この人・・・

「じゃあ、私はこれで！」

と俺に背を向けて手を振り立ち去ろうとした。

『ちょちょちょ・・・ちょっと待って！』

俺は自分から離れてく女性の肩を掴み振り向かせる。

『どういう事？』

「別に。詳しい事はお兄ちゃんに聞いて？」

と言って俺の手を振り払い
“バイバイ”と言って人混みに消えて行った。

1人残された俺は状況把握出来ず立ち尽くす。

ここで待ってろって言った兄貴は蛍とデートで。

謎の女は兄貴の姿確認した途端去って行く。

理由は兄貴に聞け。

は？！

さっぱり分かん。

何がどうなんてるんだ？

あ。

1つだけ分かる事があった。

蛭は兄貴とデートだって事。

それから

・・・手を繋いでたって事。

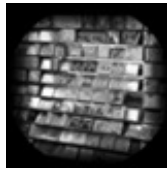
そりゃ繋ぐか。
夫婦だもんな・・・。

結局、何がなんだか最初から最後までさっぱり把握出来ず。

まあ・・・いいか。
兄貴帰ってきたら聞いてみよ。

俺はその場を離れ今日1番行きたかった場所に向かった。

それは、CDショップ。



蛍が買ってきた“Dear”が俺も欲しくなって。

ダウンロードじゃなくて蛍が買ったCDが俺も欲しくなって。

何だかそれを聴いてると
蛍とどっか少しでも繋がってるような気持ちになるから・・・。

って

俺の勝手な妄想だけど。

でもいいんだ。

CDショップに行き目的のCDを手にする。

ブルー系で蝶が舞う幻想的で綺麗な雰囲気デザイン

これが好きだと言った蛍の笑顔が俺は好きだけどな。

なんて思いながら蛍の顔を眺めたのを思い出す。

蛍の声

蛍の笑顔

蛍の涙

蛍の・・・温もり

はあ。

切な苦しい・・・。

てか

良くこの状況と一緒に居るなと自分自身褒めてやりたい。

でも、仕方ないよな。

“家族”の一員なんだから

俺はこのCDと、他お気に入りの洋楽を数枚購入し

まだ何となく家に帰りたくなかったから
テキトーに時間を潰し家に帰った。

『ただいまあ』

とリビングの扉を開けると蛍が何やら財布を持って出掛けようとしていた。

「おお！今日どうだった？」

とニタニタしながら聞いてくる兄貴。

てか、てか！

笑ってる場合じゃねーし！！

『お前なあ！今日どうだったじゃ・・・』

「私！ちょっとコンビニへ行ってきますっ！！」

兄貴に詰め寄る俺の言葉を遮るように
慌てて蛍は出て行った。

何だ？

突如飛び出して行った蛍を気にもせず

「ビックリしただろ？」

と相変わらずニタ顔で話す兄貴。

いや。

そりゃびっくりするけど。
びっくりしたけれども

蛭1人で行かせていいのか??

俺は謎の女よりそっちの方が気になり
兄貴に

『そんな事より1人で出て行かせて大丈夫なのか?』

と聞いた。

すると、兄貴はさっきまでのニヤ顔から一瞬だけ真顔になり

「気になる?」

と聞いて俺を見てニヤッと笑う。

『は?』

「そんな気になる? 蛭の事。」

・・・は?

兄貴何言って・・・。

「なんてな。冗談。」

兄貴の言葉に戸惑う俺を見てプツと吹き出す。

『あの・・・笑えないんっすけど。』

いや。マジで。

何なんだよ一体。

「わりーわりー！んで蛭迎えに行ってやってくんない？」

『何で俺が・・・。兄貴が行けし』

「俺今からまた仕事なんだ。だから頼むな！」

と言い切って自分の部屋に入って行った。

というか・・・。

今日の兄貴

何か・・・変？

何か兄貴の態度に違和感を感じつつも俺は蛭を迎えにコンビニへ向かった。

———がっ！！！！！！

居ないじゃんっ！！！！

コンビニってここら辺じゃこの店しかないはず・・・。

でも居ないし出くわさなかったし。

どこ行っ・・・。

あ。

もしかして。

俺は急いで思いつく場所に向かった。

その場所は

蛭が1人で居た公園。

俺が2度と1人で行くなと言った公園。

・ ・ やっぱり居た。

前回と同様蛭は1人で星を眺めていた。

ったく。

あれだけ1人はダメだと言ったのに。

危ない思いしてんののに何で1人で来るんだよ。

何かあってからじゃ遅いだろうが！

人の気も知らないでのんびり星を眺めてる蛭に
俺はイライライライラ・ ・ 。

つい感情任せで叱る俺。

蛭は誤魔化そうとしておどけてみせるけど通用するかつつの。

俺。

マジで怒ってるんですけど。

すると蛭は

「ほっとけばいいじゃん」

なんて言いやがった。

逆ギレか?!!

ほっとくれたらほっとくし！
言われなくてほっとくし！！

ほっとけないから困ってんだろうが！！

なんて思うと余計に蛍に腹が立つ。

『いい加減にしろ！！人の心配なんだと思ってるわけ？』

怒り任せに怒鳴ってしまった。

でも。

どれだけ心配したか。

どれだけ心配してるか分かって欲しくて。

そんな俺に“ほっといて”なんて切ない事言って欲しくなくて。

俺は蛍の手を掴み帰ろうと引っ張った。

が、

蛍は俺の腕を払い除け

凄く泣きそうで
凄く切ない表情を浮かべていた。

そして1番触れちゃいけない部分を俺に突いてくる。

「心配するのは義姉として？」

って。

義姉として心配なんか1度だってした事ない。

1度だって蛍の事義姉としてみたことなんてないよ。

と喉まで出かかる言葉を俺は呑み込む。

俺はそうやって我慢してるのに蛍は

今ここで1人で居たのは俺を感じたかったからだと言う。

俺が星が好きだからここに1人で来てたと言う。

そして

俺の事1度も義弟としてみた事がないと言おうとする。

俺はその言葉だけは遮り静止させた。

蛍

それ以上はダメだよ。

それから先の言葉は今の蛍じゃダメなんだよ・・・。

それ以降の言葉は感情だけじゃダメなんだよ・・・蛍。

覚悟を決めてからじゃないとダメなんだよ・・・。

でなきゃ意味がないんだよ、蛍。

俺は目の前で泣いてる蛍の頭をポンポンと軽く叩き

『帰るぞ』

と微笑み蛍の腕を引っ張り来た道を帰る。

帰り道蛍は後ろで泣いたまま俺に引っ張られる形で歩く。

・・・泣くなよ。

『ちょっと・・・寄り道するか』

「・・・え？」

『行こっ』

泣いてる蛍を泣き止ますために
俺はちょっと寄り道する事にした。

そこは、この間海の帰り家の近所を探索しながら帰ってる時に
見つけた場所。

きっとそこなら蛍の涙も止まるはず。

そして喜んでくれる・・・はず。

そう思うと歩く速度も上がり完全蛍をけん引する格好になりつつも
俺はその場所に向かった。

「ど・・・どこ行くの？」

不思議そうに背後から蛍が聞いてくるけど
俺は聞こえてないフリをしてひたすら黙ったまま
歩き続ける事20分。

目的の場所に到着。

すると。

さっきまで泣いてた蛍の顔から涙が引き少し笑顔が。

「わあ〜っ！凄いつつ！」

『だろ？』

得意気な俺。

だって。

蛍も泣き止まず計画もバッチリ成功！
そして感動もさせて笑顔にも。

トリプル成功！！

「凄いね！こんな所あるの知らなかったあ・・・。」

と凄く蛍は満足そう。

そんな蛍を見てるだけで俺も満足。

「ここって何でこんなにホタルが居るの？」

『ホタルの里らしいよ。』

と俺は川の向こうに立ってる看板を指差した。

「ほんとだ！」

この場所は町全体で川を綺麗にしてるらしく。

だからホタルが生殖するらしい。

川の上、周りの草木を無数のホタルが飛ぶ風景は夏の風物詩の1つだな

なんて思ったりする。

ホタルの儂く優しい光を満足そうに微笑みながら見てる蛍。

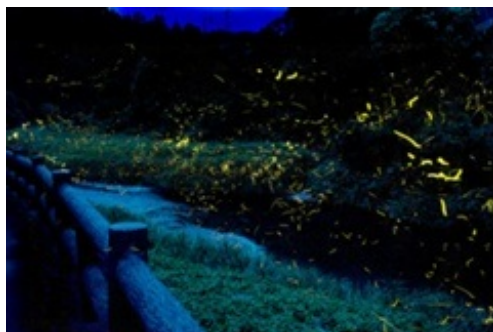
蛍がホタルを満喫。

そんなホタルを見てる蛍を俺は満喫。

儂く優しく・・・って。

なんだか蛍そのものだな。

蛍は俺を優しく儂くそして温かく癒す。



俺はそんな蛍が大好きだ。

誰よりも何よりも大好きだ。

だけど。

蛍に言いながら俺には覚悟が出来てるのか・・・？

俺自身全てを捨て蛍と一緒に覚悟があるのか？

俺に・・・

自分に問いかけながら

ホタルを優しく見つめる蛍をずっと見つめていた。